

慶應義塾大学教養研究センターシンポジウム 6

少人数セミナー形式授業の 理念・目的とその手法



慶應義塾大学教養研究センター
Keio Research Center for the Liberal Arts

The Liberal Arts

慶應義塾大学教養研究センター

第6回シンポジウム

「少人数セミナー形式授業の 理念・目的とその手法」

2004年12月8日(水) 16:30～19:30
慶應義塾大学日吉キャンパス来往舎1階 シンポジウムスペースにて

Program

16:30～	あいさつ	近藤明彦
16:35～	シンポジウム趣旨	種村和史
16:45～	パネリスト発表（各15分程度）	伊藤行雄 朝吹亮二 熊倉敬聡 坂本 光 種村和史
18:00～	休憩（10分間）	
18:10～	ディスカッサントによる質問 &	全体討論 近藤明彦 長谷川由利子 田倉麻理（経済学部3学年） 森本陽介（経済学部3学年）

パネリスト発表要旨

(当日の配付資料より抜粋)

伊藤 行雄

経済学部では昭和29年(1954年)より「自由研究」という名称のセミナーが開講されている。すでに50年にも及ぶ伝統がある日吉キャンパスのセミナーであるが、当初は三田のセミナーのプロゼミ的色彩が強かったようで、早い時点から専門的な知識を身につけるための入門的なセミナーとしてスタートした。しかし、昭和40年(1965年)には早くも「自由研究」を改変して日吉所属の教員が担当するようになり、専門とは違う日吉の教員の専門性を生かしたセミナーが開講されている。日吉での開設当初に20コマ三田の教員と合わせて30コマ近い「自由研究」のセミナーが展開されたことから、経済学の枠組みを超えた少人数形式を尊重した点、時代を先取りしていたともいえるのではないか。他学部にも解放された「自由研究セミナー」(現在の名称)をさらにどのように発展させていくか、教養としてのセミナーを考えるうえで重要な課題でもある。

朝吹 亮二

法学部では1980年代初頭より「一般教育研究会」という名称で外国語・旧一般教育課程の担当者が自分の専門分野でセミナー形式の授業を行ってきた。1991年の大綱化を期に、「人文科学特論」「人文科学研究会」「自然科学研究会」に発展し、現在、3、4年次まで継続的に学べるようになっている。

「一般教育研究会」設置以前は、日吉設置の授業は大教室での講義科目が多かった。それゆえ、一方通行的な授業になる危険性もあった。少人数セミナー形式授業の導入趣旨は、①外国語科目や(旧)一般教育課程科目担当者の実際の専門を活かして教育に組み入れる、②学生・教員間で密なコミュニケーションのとれる(双方向的な)授業体制をつくり、個別的な指導ができるようにする、③大学での勉強・研究の方法を考え、その能力を育成する、といったことが考えられた。

法学部では20年の実績があるが、近年は、実際に専門科目のゼミと同様に熱心に参加し、卒論と同等の充実した成果をあげている学生もある。こうした経緯を踏まえ、2004年度から「法学部副専攻認定制度」(資料参照)をつくり、副専攻に近い制度(学位を出すものではない)を導入した。

熊倉 敬聡

理工学部では、科学技術の先端化・グローバル化や学生の価値観の急速な多様化に応えるために、学部教育・研究システムの大改革を行い、1996年度から全く新しいカリキュラムをスタートさせた。その目玉のひとつが、学部の1・2年生を対象とした少人数の双方向的授業「総合教育セミナー」である。その目的は、

自らの問題意識に基づいて自発的に調査・探求する行動力、断片的知識をまとめ上げる構想力、そしてそれを他者に論理的に伝達する表現力を養成することである。この科目は、理工系学生に新たな人間観・社会観・世界観を形成してもらうために、言語に根ざした思考力と発信力を身につけてもらうように作られた演習科目である。

坂本 光

文学部においては、日吉キャンパスに二種の「少人数セミナー形式授業」を設置している。18専攻によって設置され、主として三田所属教員が担当する「特論」と、これとは別個に日吉キャンパス所属教員が担当する「総合教育セミナー」である。いずれにおいてもその目的は、①大学で学べること、すなわち大学という学習・研究環境が持つポテンシャルを能動的に体験させる、②大学で必要とされる学習スキルの訓練を能動的な学習プロセスを通して行う、という2点にある。また履修者数を制限した選択科目として、積極性を持つ学生のみを対象とする点も、双方の科目に共通している。

①における課題は次学年以降における発展性の確保だが、これは専攻課程との連続性、専攻の無い分野では独自の演習科目を三田に設置することによって、一定の解決を見ている。しかし②においては、対象学生の再検討が今後の大きな課題である。学習スキルの訓練は新入生全員に有用なものであり、同時にその必要性は年を追って高まりつつある。従来型のセミナー形式科目に併設されるものとして、学習スキルの訓練を主目的とした必修科目のセミナー授業を設置することが望まれる。またそれに際しては、共通化された教授法と評価法の確立が必要となるだろう。

種村 和史

商学部では、第1、2学年の学生対象の少人数教育を目的とした科目として「総合教育セミナー」を設置しているが、より多くの学生が履修できるよう、2005年度より日吉所属の教員全員がこの科目を担当することになった。この科目の共通の目的として、学生が早い時期から問題発見および問題解決能力を養うということがある。各教員の専門領域に関連したテーマによってデザインされた授業の中で、この目的をどのように実現させるか、当初ためらいや不安があったのも事実である。このような中で、セミナーの理念・方法、あるいは各教員の経験的な知恵を商学部全体で共有できるよう、種々の試みも行われている。これらのことについて報告したい。混沌として宙ぶらりんのクエスチョンの状態を、いかにして発展性のある問題意識に精錬していくか、その苦労は私自身常に味わっているが、それを学生に伝え経験してもらうことには、また別種の困難さがあると思う。この機会にさまざまな意見や意見を伺い吸収していきたい。

はじめに

大学教養研究センター副所長 近藤明彦

私は教養研究センターの副所長を仰せつかっております近藤と申します。まず、私から最初に本日の企画について少しご挨拶をさせていただきたいと思います。

私は30数年前に大学を卒業しました。その当時の大学教育で問題になっていた点は、いわゆるマスプロ教育という問題です。慶應も例外ではありませんで、定員400人の教室に対して、履修している学生が1000人近くいたりするなど、とんでもない教育をやっていた時代がかつてありました。その後、もっと適正な授業をするべきだという動きが始まり、1991年には大学設置基準の大綱化が行われました。大綱化をきっかけにさまざまな大学が授業の改革を行ったのですが、その流れはいまでも続いていると思います。

そのなかで、大学の国立・私立を問わず共通しているのは、いわゆる座学の授業ではない、少人数形式、セミナー形式の授業を非常に大事にしているという点でしょう。大学によっては、少人数セミナーをまったく自由に実施するとた

いへんなので、学生を学籍番号順に切り分けて無理矢理教えるという形で実施していたりすることもあります。こうした形での実施が果たしていいのかどうかということも問題になるのではないかと思います。

慶應大学では、学部によっては少人数セミ

ナーを昔から続けていますし、近年になって少人数セミナーを始めた学部もあると思います。やはりそれぞれの学部の事情等がありまして、理念や目的がそれぞれに若干違うかもしれません。あるいは、さらに共通したところもあるかもしれません。ただ、日吉キャンパスというひとつの学びの場において、近年、学部の壁を超えて他学部の科目も取れるという状況が出て来ているなかで、各学部の少人数セミナーのすりあわせも必要ではないかということも考えられるわけです。

今回は、各学部を代表して5人の先生方にお越しいただいて、各学部の少人数セミナーの設置の理念や目的、そしてどういう形で具体的に実施されているのかというお話を聞き、これから先、日吉キャンパスで展開される少人数セミナーがより発展するための方向性を見つけられればと思っています。先ほど申しました大教室でのマスプロ授業に対して、少人数のセミナー授業というのは、一方通行ではなく、学生と教員が相互にインタラクティブにコミュニケーションを取れる、あるいは学生同士がひとつのテーマについてディスカッションできるといった、いろいろな利点があると思います。そうした利点がさらにうまく機能するような方向性が出せればと思っていますので、パネリストの先生方の具体的なお話を聞いた後、会場全体で活発な議論を交わしたいと思っています。また、今回のシンポジウムには学生諸君もたくさん来てくれています。今後役に立つ新たな少人数セミナーを構築していくために、その基礎になるような盛んなディスカッションを期待しております。

それでは先生方、よろしくお願いいたします。



近藤明彦副所長

「少人数セミナー形式授業の 理念・目的とその手法」

司会 種村和史
パネリスト 伊藤行雄
朝吹亮二
熊倉敬聡
坂本 光
種村和史
ディスカッサント 近藤明彦
長谷川由利子
田倉麻理
森本陽介

本塾商学部助教授
本塾経済学部教授
本塾法学部教授
本塾理工学部助教授
本塾文学部助教授
本塾商学部助教授
本塾体育研究所教授
本塾商学部助教授
本塾経済学部3学年
本塾経済学部3学年

種村和史 皆さん、こんにちは。本日はわれわれのシンポジウムにご参加いただきましてありがとうございます。本日、司会を務めます商学部の種村です。よろしくお願いいたします。

このシンポジウムの主旨について、ただいま近藤先生からご説明がありましたが、私からも簡単に補足したいと思います。われわれは、法学部の木俣先生を中心にして、教養研究センターの基盤研究として、日吉の教養教育の現状と今後について考える作業をこのところ続けておりますが、そのなかで少人数セミナーが非常に重要な意味をもっているということを改めて認識しました。

この少人数セミナーは現在全学部で展開されており、各学部あるいは義塾全体から寄せられている期待が非常に高い授業です。履修する学生からの期待も非常に高い授業です。また、各学部でそれぞれの少人数セミナーを開設しているわけですが、多くは併設科目として他学部にも開放されているので、全学部の学生が自分の興味に基づいて自由に履修できるようになっております。そういう、開かれていて、期待の大きい授業ですが、詳しく見ていきますと、各学部ごとに科目名や授業の目的、形式、運営方法など、非常に多種多様です。そういう状況のなかで、学生が履修する際に本当に選択しやすい形になっているのだろうかということも、ひとつ問題として浮かび上がってきました。

一方、われわれ担当教員の立場に立ちますと、この少人数セミナーは、普通の科目とは違い、すべての教員が等し

く担当する可能性のある授業です。先に申しましたように、履修する学生も非常に幅広く、いろいろな期待や目的意識をもって履修します。ですので、期待が高い反面、われわれ教員にとっては不安や負担感も大きいという側面もあるわけです。つまり、少人数セミナーというのは、さまざまな人のさまざまな思いが錯綜している特徴的な授業ではないかと、私は思っています。

このところ、各学部ではカリキュラム改革が計画され、実施されようとしているわけですが、このカリキュラム改革によって教育の新たな展開が起こることも承知しております。このような現状の中で、少人数セミナーに対するわれわれの理解が果たして十分なのだろうかという反省のもとに、各学部の実態について、ざくばらんな情報交換の場をぜひ一度もつべきではないかという主旨から、このシンポジウムが企画されました。またこの少人数セミナーに対しては、いま申し上げましたように、教える側だけでなく、そこに参加する学生諸君のいろいろな思いもあるでしょうし、学事センターやメディアセンター、ITCなど、立場によっても、この授業に対する考え方や感想、今後のプランなどが異なっているのではないかと考えています。そこで、各学部の実状を話し合うと同時に、いろいろな人々の意見を共通の場でお互いに出し合って、その中で何か今後発展するためのヒントのようなものが得られたらよいのではないかと考えております。

ということで、本日はお忙しいところ、各学部の先生方に



種村和史氏

集まっていただきました。まず最初に、各学部での少人数セミナーの運営の仕方や設置の経緯、ご自身が授業を担当して得たお考えや経験、さらにもう少し広くとらえて教養教育全体のなかの少人数セミナーの位置づけなどにつきまして、ご報告いただきたいと思います。その後で、会場の皆さまからのご自由な意見をいただき、議論を深めていきたいと思っています。

それではさっそくパネリストの発表に入りたいと思います。最初に経済学部の伊藤先生、よろしくお願いいたします。

経済学部の「自由研究セミナー」

伊藤行雄 経済学部の伊藤です。経済学部の日吉の少人数教育には、皆さんがご存じの英語セミナーやスタディ・スキルズなどの授業がいろいろとありますが、今日は「自由研究セミナー」と呼ばれている科目に絞ってお話をしたいと思います。話の流れは、まず最初に「自由研究セミナー」の設置の経緯と目的について、そして私自身が「自由研究セミナー」をどのように行っているかということ、最後に先ほど種村先生からお話がありましたように、教養教育全体のなかでこの少人数セミナーをどのように位置づけていくべきかという点についてお話をしたいと思います。

1954年にスタートしたプロゼミ

経済学部の自由研究セミナーは、おそらく慶應の日吉キャンパスで行われてきた少人数教育では最も長い歴史をもつ科目ではないかと思います。日吉、三田の学事センター（経済学部係）のご協力で、いろいろと調べていただいた結

果、経済学部の「自由研究セミナー」ができたのは1954年だとわかりました。ですから、いまからざっと50年前です。旧教授会の記録によると、1954年の3月31日の教授会で少人数セミナーに関する案件が発議されています。

その記事によれば、2年生のためにプロゼミナールを作っている。プロゼミナールというのは、ドイツ語を取っている皆さんならご存じだと思うのですが、ゼミのひとつ前の、どちらかというと初級段階のゼミナールです。そのような位置づけで設置されて、その年のうちに、多少新学期に遅れてスタートすることになっても、セミナーを開講することが決定されています。その運営の仕方などについては、学部長、日吉主任、日吉担当の教授の間で話し合って作るというように記載されています。1954年5月6日の教授会では「この日吉プロゼミは名称を自由研究とする」という項目が教授会の議事録として残されています。ここで「自由研究」という言葉が初めて出てきているわけです。そのときの担当者の名前を見ますと、上田保先生という有名な英文学者・詩人の名前も載っております。このことから、必ずしも三田のゼミのためのプロゼミではないということが理念として謳われていたのだと思われます。

残念ながら、1954年から1960年までの講義要項がありません。福澤センターの資料も調べていただいたのですが、存在しないとのこと。その部分については空白です。1960年から1964年までについては講義要項がありますが、ここには日吉の先生の名前がひとりも出てこないのです。おそらく、この時期にはプロゼミ的な設定で、やはりあくまでも三田の授業の前提という形で実施されていたのではないかと思われます。

「自由研究-日吉ゼミナール」の誕生

ところが1965年、私がちょうど大学2年生のときなのですが、「自由研究-日吉ゼミナール」という別の項目立てができます。このときに初めて日吉の先生方が「自由研究」のゼミを担当するようになったわけですね。これは講義要項の目次で見ると、人文社会、自然科学、専門科学と並んで、経済学部の「自由研究」と「自由研究-日吉ゼミナール」がそれぞれ別立てされていたため、他の学部にもセミナーがなかった時代に非常に目立つものであったと推定されます。そしてこの状態のまま1971年ぐらまで続きまして、「自由研究Ⅰ」「自由研究Ⅱ」という言い方で分かれていきます。「自由

研究Ⅰ」というのは日吉の先生が担当し、三田専門の先生が担当する「自由研究Ⅱ」は2年生しか取れないという規則がありました。

そしてその後、1992年ぐらいまではほぼ同じ状態が続いています。コマ数は1970年代でおよそ35～40コマ。1980年代から92年までは、45～57コマ、最高で66コマもありました。このことは私自身もあまり意識したことはなかったのですが、先ほど専門の先生だけでなく日吉の先生も受けもつようになったというのは、やはり当時日吉の先生方も、このセミナーを持ちたい、そういう強い意欲を当時の教授会が認めたのではないかと考えています。

大学設置基準大綱化後の1992年には、一挙に大学のカリキュラムが変わっていきまして、かつて必修だった科目が必修でなくなったり、大きな変革が行われました。「自由研究セミナー」に関して言えば、「自由研究Ⅰ」「自由研究Ⅱ」に分かれて設置されていたのが「自由研究セミナー」というひとつの形になって、単位も2単位から4単位になりました。それまでは演習科目として、1年間2単位でやっていたわけですね。昭和40年代頃は卒業単位が150単位で、日吉で履修する単位がそのうち80単位と、そういう時代では単位としては少ないものでしたが、改革で4単位に増やすということですから、「自由研究セミナー」の総合教育のなかにおける位置づけをかなり大きくしていったというのが経緯です。

日吉のセミナーは何も経済学部だけではなく、商学部や法学部など他の学部も行われていました。たとえば、商学部などでも比較的早い時期、1965年から経済の自由研究セミナーに近い形で少人数セミナーをやっていますし、法学部はもう少し遅く始まったと思います。1992年の大学の改革の時期に、どこの学部も一斉に大きく変わって、それが今日に至っているという状況です。

それ以降は、少人数クラスがいろいろと増えてきたために、「自由研究セミナー」は総コマ数的には少し下火になっている傾向があります。しかし内容的にはいろいろなテーマのものが展開していて、特にここ2年ほどは学部の壁が取り払われたために、私のセミナーにも、昨年は理工、医学部を除く全学部の学生が参加してくれました。他学部との関係のなかで考えれば、これから「自由研究セミナー」は非常に新しい形態の科目になっていくのではないかと考えられます。



伊藤行雄氏

主眼は基礎的トレーニング

では、私自身はこの少人数セミナーをどのようにやっているかと言いますと、まず三田のセミナーと違って、選抜は当然行いません。来た者は拒まず、です。なかには非常にセミナー形式に慣れた人もいれば、ほとんど不慣れな学生が参加して、来てじっと座っているだけの人もいます。私の場合、とにかく来た学生すべてを1年後には何とかみんなの前で話したり、まとめたりすることができるようになることを目標として基礎的なトレーニングをすることが主眼です。ただ議論をしたり、知識を広げるといっただけのものではありません。

私は「都市と文化」「都市論」などをテーマにテキストを使ってセミナーを行うことが多いのですが、まずはテキストを正確に読むことが大事で、そのためにはレジュメの作成に力を入れさせます。レジュメの作成とはテキストの要約ですね。それには私の意見をなるべく差し挟まないような形でやっています。そして、担当者はレジュメを他のメンバーに配って、それを口頭で説明しながら内容の把握にまず努めます。そういう基礎訓練をやって、自分の意見は二の次にさせます。もちろん、ときには学生たちに主導権を与えて、自分の意見で最初からやらせるものもありますが、私自身はまずきちんと正確に読めるということを基礎として、そのあとで自分の意見を発表するという形をとっています。研究発表はそのような基礎的なトレーニングをある程度積んでからやらせします。そして、それを口頭で皆さんに伝えながら、1年間かけてそれを毎回やっていきます。

その結果として、テキストを正確に読める、まとめる力が早くなる、そして後半には発表やレポートにまとめる基礎力

がついていくわけですから、参加者の前で話す度胸がだんだんついてくるという利点もあります。その過程で、どのような文献を学生が探してくるかも非常に興味がありますので、図書館の利用のしかたについても取り上げます。これは教養研究センターでやっている「スタディ・スキルズ」の授業に近いかなと思っています。そういうことをやりながら、とにかく年間を通してレジュメを作って発表して、皆さんの前でちゃんと話せるようになることにまず主眼をおいています。

そのほかに、この7年間、夏に合宿をやっています。集中的な合宿でして、初日は指定のテキストのレジュメ発表を行いながら一気に6〜7時間かけてセミナーを行います。翌日は研究発表を行います。2日間で12時間ぐらいトレーニングをします。この合宿にはOBや若手の研究者、社会人なども参加して、いろいろな意見を言ってもらったり、社会人と学生の交流も図っています。これも少人数教育の特色のひとつではないかと思っています。ただ、今後も続けられるかどうかわかりませんが、いずれにせよ、いまのところはがんばってやっています。

また、外部から講師を呼んで、土曜日に5〜6時間ぐらいセミナーを、2年に1度程度やっています。

誘導展開型と自発展型の研究プロジェクト

最後に、少人数セミナーが教養教育全体のなかでどのような位置を占めるべきかという点です。

経済学部では来年度からカリキュラム改革が始まりまして、その中には3、4年生から適用する「研究プロジェクト」がスタートします。この「研究プロジェクト」は専門の特殊科目の扱いで、6単位が与えられます。これは「自由研究セミナー」だけでなく、日吉のセミナーで勉強した成果をもっと深めたいという学生のためのものです。「研究プロジェクト」では、学生を直接指導する先生とは別にコーディネータと呼ばれる先生が、授業のサポートをします。すでに担当者先生も決まっています。この「研究プロジェクト」には講義要項に載る形で設置される誘導展開型のもの、もうひとつは学生が自ら研究計画を立てて、こういう先生のところでこういうことをやりたいと申し出る自発展型というふたつのタイプがあります。自発展型では、研究計画書および1年間どうやっていくかについて、必ずコーディネータの先生がチェックし、指導してもらえる先生を紹介します。そして、両方のタイプの参加者は中間発表を行い、最後はウェブ上で公開する

といったいくつかの条件がともなっています。

おそらく他の学部とは少し違うかもしれませんが、これから朝吹先生が言及なさると思います、法学部の「副専攻認定制度」の方がいいのかもしれませんが、いずれにしても、この制度が経済学部だけのものでなく、日吉時代に他学部のセミナーで勉強した他学部学生であっても「研究プロジェクト」の履修を認める方向に進めばよいと考えます。そうなれば、教養教育の全体性の中で非常におもしろいものが展開していくのではないかと考えています。

法学部の「一般教育研究会」

朝吹亮二 朝吹です。いま伊藤さんから経済学部の制度についてお話いただき、非常に優れた制度だなと思いながら聞いておりました。1950年代から始まっているというのがまず驚きですね。日吉の先生がもったのが1960年代からということですが、後ほど種村さんからもお話があると思いますが、商学部でも60年代末からこうした少人数セミナー授業があったようでして、これにも驚いております。

法学部では、1980年代初頭、正確に言えば83年から、「一般教育研究会」という名前で、少人数セミナー授業をスタートいたしました。ですからすでにもう20年くらいの歴史があるわけです。この「一般教育研究会」という名称からおそらく想像がつくと思うのですが、ここには三田の、いわゆる専門の先生のゼミは含まれていなくて、当初より一般教育や外国語を教える教員が担当するゼミ形式の授業ということで設立されました。私もちょうど慶應に専任になった当方で、熱心に一般教育研究会をもっておりまして。私の専門はシュルレアリスムというフランスの文学・芸術運動で、こういうテーマで研究会を行っておりまして。人文科学だけではなく、他にも自然科学の担当者も自分の専門に沿った自然科学の少人数授業をもっておりまして。

伊藤さんが現在やっていらっしゃる授業と比べると、私はもう少し一般的なイメージの授業に近いかもしれません。私は、学部では他の科目を教えることもあります、基本的にフランス語を教えることが多いわけです。自分の大学の研究者としての専門がシュルレアリスムですので、自分の研究を、普段そういう話をできない法学部の学生と一緒に研究していくということで始めたわけです。おそらく法学部のこの一般教育研究会を担当された方は、多くがこのようなスタンスで取り組んできたのではないかと思います。

一般教育研究会という名称は10年くらい続きました。法学部では93年頃からカリキュラム改革を行いまして、現在では「人文科学特論」が日吉設置の科目で、1、2年生が履修します。その学生が三田に進んで、日吉で勉強したことを延長してさらに深めたい場合は、三田に設置されている「人文科学研究会」という名称の少人数授業が取ります。そしてなぜか同じ学部の中ですが、自然科学では名称が異なっておりまして、「自然科学研究会」という少人数セミナーも設置されております。これは必要に応じて、三田だけでなく、日吉に設置することもできる科目です。なぜこのように名称がばらばらなのか、自分の学部ながらいささか疑問に思うのですが、事実上はこのようになっております。

副専攻認定制の導入

今日私が主にお話したいのは、これまでのことではなく、今後法学部がどのような方向に向かっているかという点です。それが法学部の「副専攻認定制度」です。経済学部の新しい制度に近く、法学部と経済学部で偶然同じような制度が発足したのかと感じております。

法学部では今年度入学者を対象として導入した制度で、つまりすでにスタートしています。これは三田に人文科学や自然科学の研究会を置くというものです。ここで2年間、いわゆるゼミナールをとって、卒業論文に相当するような卒業発表、成果発表を出してもらいます。卒業発表、成果発表というのは、卒業論文のような記述式のレポートでもいいですし、あるいは原稿化できないようなものもあるかもしれないので、必ずしも論文とは銘打っていないくて、成果を出しても

らうことを条件にしております。

なぜ先に3、4年生の話をしたかというと、実はこの副専攻認定制度というのは実験的な段階でありまして、特に日吉時代には「これを取りなさい」「あれを取りなさい」というふうにはむしろしていません。むしろ積極的に決めていないとも言えるでしょう。

たとえば法学部では、「地域文化論」という中規模授業のなかに、日吉の人文科学の専門家たちが担当している授業があります。これはたとえばフランスの枠組みでフランスの文化について広く講義をする授業です。ある学生が「地域文化論(フランス)」を履修してみて、たまたまそれにすごく興味をもった。自分で積極的に探して、経済学部の自由セミナー、あるいは自分で時間割のなかから別の学部の「フランス文学」や「フランス美術」などで興味のあるものを見つけて、その先生を訪ねて交渉し履修することを、法学部では薦めているわけです。2年間、日吉で自分の興味や関心に基づいて自由に履修してきなさいと。つまり日吉の2年間は、法学部設置の授業だけでなく、他学部からも自分の関心のあるような授業を見つけてきて、自由にどんどん履修しなさい。そしてそれを2年間、自分の中で積み上げていって、三田に移る。三田では、法学部の設置した「人文科学研究会」や「自然科学研究会」が複数あります。もしフランス文化にまだ興味をもっていて、これを自分の成果としてまとめたいという場合には、三田設置の人文科学研究会のフランス文化の担当者のところに行って、「日吉ではこんな授業やあんな授業を履修しました。こういうことをやってみたい」と、その担当者と話し合ってください。そして3、4年生の2年間で研究を深めていっていただいて成果を発表してもらおう。

その成果が充実したものであれば、学部として、「〇〇君は4年間、こういうテーマで研究を行ってきて立派な成果を収めた」という、一種の認定証のようなものを出します。これが副専攻認定制度です。もちろん法学部は政治学科と法律学科のふたつの学科に分かれておりまして、修了後は法学士をもらうわけですが、それとは別に法学部から学部長名でこうした認定証のようなものが授与されます。

この制度は今年度の入学者から適用されますので、実際に彼らがこの副専攻認定制度で認定する研究会に参加するのは、彼らが3年になってから、すなわち2年後のことです。



朝吹亮二氏

副専攻制度に向けての第一歩

副専攻認定制度とちょっと曖昧な言葉になっていますのは、もちろんご承知のとおり、世間で言う副専攻制度とは主旨が違うからです。たとえば、法学部で自分の主専攻は法律学あるいは政治学だが、一方副専攻で経済学や商学を勉強してみたい。あるいは先ほど言いましたように、法学部にも学科がふたつありますから、主専攻はたとえば法律で、副専攻として政治学を勉強したいという副専攻の取り方があります。ゆくゆくは、こうした学科を超えた、ないしは学部も超えた副専攻制度、いわゆるアメリカの大学などで言われているダブルメジャーのような制度に向けて、徐々に進めていきたいと思っています。しかしなかなか厚い壁がありまして、とりあえずは法学部の総合教育科目と言われているもの、つまり人文科学や自然科学の中でまず一步を踏み出してみようということで始めた制度です。

私自身がこの制度のなかで最もおもしろいと思っている点は、日吉在籍中に自分でプログラムを組み立てるということです。つまりこちらから「これとあれを取りなさい。そうすれば認定しますよ」とあらかじめ決めているのではなく、ある程度科目の履修は学生本人に任せていること。それも単に自学部の科目だけではなく、他学部設置されている豊富な科目を自由に選べるという点。日吉には本当にたくさん面白い授業があるわけで、そういうものを自分で見つけて、自分でプログラムを組み立てて、そして自分の副専攻を見つけて欲しいという主旨がおもしろいところではないかと感じております。これを成功させるか否かは、もちろん学生諸君の知的好奇心にかかっているわけで、ぜひこれを有効に活用していただきたいと思っております。

理工学部の「総合教育セミナー」

熊倉敬聡 私は現在、理工学部の総合教育セミナーの世話役をやっている、その関係上、今日はその立場からお話したいと思います。

理工学部では1996年度からまったく新しいカリキュラムを学部、そして4年後には大学院にも導入しました。その一環として、少人数セミナーである「総合教育セミナー」を導入しました。総合教育セミナーというのは、総合教育科目のひとつとして位置付けられていて、目的は主に3つあります。①自発的に調査・探求する行動力、②断片的知識を

まとめあげる構想力、③他者に論理的に伝達する表現力、を目的として設置された科目です。主に理工学部の1、2年生が対象で、1クラスの上限が20名です。

少なくとも発足当初は原則として、日吉の総合教育あるいは外国語教育の教員と、矢上の専門課程の教員が半数ずつ共同して担当することになっていました。理工学部の新カリキュラムは実質的に春学期・秋学期の半期制ですので、この総合教育セミナーも半期制になっています。春・秋あわせて約25クラスでスタートしました。1クラスの上限が20名ですので、単純計算して最大500名です。理工学部は1学年1000名前後ですので、その半数までが履修可能となっています。発足当時はかなりガイダンスにも力を入れて、宣伝しましたので、500名近い学生が履修していたと思います。学事センターに調べてもらったのですが、過去の統計が99年までしかなくて、でも99年の段階でも1、2年生あわせて2000人中の約400人が履修しています。2、3年前からはクラス数も多少減りまして、300人程度が履修しています。

スタディ・スキルズ習得が目的

授業内容ですが、テーマは担当の先生の自由に任されています。ですから人文系の先生でも自分の専門に近いテーマ設定が可能ですし、あるいはまったく自分の専門ではないテーマでやっていらっしゃる先生もいます。授業の大きな柱は、スタディ・スキルズの習得ですが、それに加えて、授業のテーマについての理解を深めていくことになります。

私も発足当時から去年までずっと担当していました。私の場合、年によってやり方を変えていますが、たとえば2003年度の場合は、半期で12、13回の授業を次のように組み立



熊倉敬聡氏

ています。まず最初の5回までは、授業のテーマである現代アートに関するビデオを教材として使いながら、皆でディスカッションをして、小さいレポートを3回書かせました。そのあと、論文作成と口頭発表のしかたを解説する授業を1回して、後半の5～6回は、今度はビデオではなく理論的なテキストをふたつ講読して、それに基づいた個人発表を行ってもらい、最終的にはその発表を発展させた小論文を提出してもらうというふうにしました。これはあくまで私の、この年度のやりかたですので、他の先生が同じやり方でやっているとは限りません。より書く力を養おうとする先生もいらっしゃいますし、あるいはディスカッション力をつけさせようとする先生もいらっしゃいます。

成果文集やアンケート集計、ガイダンス資料作成

担当の先生によりますが、学生たちが作成した最終的なレポートや論文をまとめて、文集を作る先生もいらっしゃいます。たとえば私が2000年度に担当したときのレポート集では、10人ぐらいの学生の最終レポートをA4サイズの小冊子にまとめました。あるいはもっと力を入れていらっしゃる先生のなかには分厚い本格的なレポート集を作る方もいらっしゃいます。

さらに、理工学部では総合教育セミナーを始めて8年ぐらい経ちますので、いろいろな工夫をしまして、たとえば学期末に授業に関するアンケートを学生に採ったりしています。「自己申告による出席率」「セミナーを実際に履修してみte感じたこと」「履修した結果、日本語の文章能力が上がったか」「人前で話し方が上達したと思うか」等々のアンケートです。そして理工学部ですので、集計が大好きでして、この結果を集計します。春・秋半期ごとに、各担当の先生が自分の学生のアンケートを集計したものを全部集めて、学部全体でアンケート集計結果を出します。さすが理工学部といったところですよ(笑)。

ガイダンスにもわりと力を入れてまして、普通の履修案内や講義要綱とは別に、総合教育セミナー専用のチラシ(A4カラー両面)を学生に配ります。ほとんどの学生は講義要綱を見るのが面倒なので、このチラシを見てどのセミナーを履修しようか決めるようです。このチラシには、各セミナーのテーマや教師の自己紹介などが書かれてまして、これで毎年およそ300～400人の学生が来ます。

しかも平成8年度から9年度にかけて、総合教育セミナ

ー自体に関する共同研究「理工学部『総合教育セミナー』の効果的運用に関する研究」を行いました。これは慶應の学事振興資金によるもので、「理工系大学生のための日本語文書知的作成法」という研究報告書も出しました。この報告書は、総合教育セミナーの目的と心得の他、実際に科学技術論文の作成法や細かいテニオハ、点の付け方等々のノウハウも含めたものとなっています。

また、ユニークで新機軸の教育を行っている大学や学部に関から重点的に補助が受けられる「特色GP」というものがありますが、理工学部がこれに選定された関係で、今年度から総合教育セミナーにも重点的に予算がつきまして、機材や非常勤やTAなどの重点化も行っています。

以上が、ざっとですが、1996年度から理工学部で行っている総合教育セミナーの概要です。

スタディ・スキルズ習得の重要性

個人的なコメントを少し付け加えます。私自身、以前フランス文学を研究していた関係で、フランスに留学した経験があります。私は慶應の経済学部出身なので、まさしく(当時の)自由研究を取ったりしました。留学してみて自分自身とてもびっくりしたことは、気がついてみると、日本の大学では論文の書き方や研究のやりかたをきちんと教わっていなかったということです。実際に論文の書き方を教わったかどうかと思ひ出してみても、大学4年間に1度も習っていなかったんですね。それで、フランスでは非常に苦労しました。特に長い論文を書く習慣がなかったので苦労しました。もちろん慶應卒業時に卒論を書いたのですが、それは卒論指導などほとんどない状態で、見よう見まねで書いてだけです。長い留学を終えて日本に帰ってきて、また修士課程に戻ったのですが、もちろん学部や研究科によって違いがあるとはいえ、多くの学部や研究科では依然同じような状態が続いていて、愕然としました。

理工学部では、幸いなことに1996年に総合教育セミナーができて、スタディ・スキルズを学生に教えるはじめています。もちろんスタディ・スキルズは欧米の高等教育の基礎のひとつです。スタディ・スキルズを教えない大学がなぜ日本に存在していたのかということ自体が非常に矛盾を抱えていることですが、スタディ・スキルズの習得はぜひとも今後の教養教育の機軸のひとつとして発展させなくてはならないと思っています。

文学部の「特論」「総合教育セミナー」

坂本光 文学部の坂本です。文学部の場合は、カリキュラムの構成上、あるいは学年ごとの使用キャンパスなど、他学部と異なった点がございます。と同時に、もちろん他学部と共通するところも多々あるかと思いますが、その両方の点について今日はお話できればと考えております。

この発表の構成ですが、まず文学部日吉キャンパスにおける少人数セミナー形式授業のカリキュラム構成をご紹介します。少人数セミナー形式授業というのは非常に言いにくいので、以降は文学で言い習わしております「演習」という言葉で置き換えさせていただきたいと思います。次に、1年生を対象とした演習の一例をご紹介します。これは今までご説明にあったさまざまな演習形式の授業に比べると、少々特殊かとも思いますが、その特殊さは文学部特有の事情によるものだと思いますので、あえてぜひご紹介したいと考えております。最後に文学部が、あるいは私、坂本が考える日吉における演習の目的と課題、また今後の見通しについてお話できればと思います。

文学部の特殊性と課題

まず文学部の特殊性は、その学年構成にあります。1年生は一般教養課程で、日吉キャンパスに在学します。1年の終わりに専攻振り分けを経まして、その後2年から4年までを専攻課程として三田キャンパスで過ごすことになります。従いまして、日吉での一般教育課程履修は1年間のみです。2年以降にも一般教育科目はございますが、専攻の授業が盛んに始まりますので、なかなかそこには注目が集まりません。同時に一般教育科目で多く教えられるものと、専攻課程に設置されている授業の内容自体がかなり重複しますので、一般教育科目あるいは教養科目について考えるときには、どうしても1年生に集中して考えがちな傾向があるかと思っています。

一方、これは余談に類することですが、外国語に関しましては、日吉と三田で1年ずつ計2年間、履修することになります。従いまして、日吉所属の教員が外国語を担当する上でも、授業の半分は自動的に三田に設置されますし、会議はほとんど三田です。したがって仕事の7-8割は三田に起こるということで、皆さん、来往舎の中で文学部の人間をあ

まり見かけないのはそのせいだのご理解いただければ幸いです(笑)。

次に、日吉における演習授業がどのように設置されているかについてお話ししたいと思います。まず日吉に設置されている演習科目には「特論」というものがあります。「人文科学特論」「社会科学特論」「自然科学特論」と、頭にそれぞれ種別がつきます。これは専攻ごとに設置されているものです。多くの場合は、専攻所属の、つまり三田キャンパス所属の教員が担当します。そして日吉に対応する部門がある場合、たとえば「英米文学専攻」と「英語部門」、「仏文学専攻」と「フランス語部門」というように関連する部門がある場合には、日吉所属の教員が担当することもあります。

運営方針は各専攻に任されています。運営のバリエーションは非常に豊富ですが、多くの場合、その目的は学生に各専攻分野を能動的に体験させる、そしてリクルートすることにあるわけです。効果的に専攻紹介することが最大の目的ですから、専攻によってはそのほうが効率がよいと考えて、オムニバス形式などの講義形式を取る専攻もございます。一方で、講義と同時に実地にやってみて面白かったという体験を提供したいと考える専攻もございます。オムニバス形式の講義と演習の2本立てというケースもあります。国文学専攻がその一例です。いずれにしても根本には、講義による受動的な学習ではその分野の特質を理解したり、面白さを実感することが難しい、という認識があるかと思っています。

次に日吉における文学部のもうひとつの演習形式授業ですが、これは他学部にも設置されております「総合教育セミナー」です。半期制の科目で、日吉所属の専任教員が担当します。そして設置は各担当者の自発的な意志によるもの



坂本 光氏

で、実際にはあまり設置数がありません。始まったのもごく近年のことです。

日吉における演習形式の授業には、いくつかの課題があります。その最大のものは、2年次以降への継続性です。「特論」に関しましては、もちろん専攻が設置しているわけですから、各専攻設置の専門科目へと自動的に引き継がれることになります。一方、総合教育セミナーですが、もちろん日吉所属の教員が設置して授業をしている科目であっても、それに対応する専攻があるならば問題はありません。たとえば日吉の教員である私が総合教育セミナーで英文学をやったとすると、英文学は三田に存在しますから、学生はそのなかから引き継ぐものを選ぶことができるわけです。

しかし、三田に対応する専攻がない語種の科目、あるいは自然科学系の科目などにつきましては、2～4年生を対象とする演習科目を三田に設置しております。これは2004年入学の学生を対象とした新学則に則ったものですので、実際には今年の1年生が2年生になる来年度から最大限の規模で、要するに対応する専攻のない科目の数だけ設置されることになります。今年度、現段階では2科目だけが先行して設置されています。さらに、こうした対応する専攻がない科目については、将来的には日吉所属教員が卒業論文指導まで行うことも検討されています。

演習形式授業の一例

次に、演習形式の授業の一例として、私が担当しました「人文科学特論(英文学)」のお話をしたいと思います。

私がこの科目を担当していたのは1996年から2001年までです。それ以前から今に至るまで、私は専攻課程の演習科目を担当しておりまして、それとまったく同じことを1年생向けに行った授業です。この「特論」という科目の定員は本来25名です。それを超える希望者があった場合には抽選を行います。先ほど申し上げましたように、運営はまったく専攻、あるいは担当教員に任されております。先生によっては、希望者全員を取るという人もいらっしゃいますし、あるいは私がその一例だったのですが、筆記テストによりたとえば15-20名を選抜することもあります。その後、初回、2回目と厳しいことを言いますと、これがまたぼろぼろと歯が抜けるように減っていき、10人ぐらいの非常に適切な規模に落ち着くわけです(笑)。

私の授業では、年間で3段階の構成を意識していました。

まず春学期は講義から始まります。これはせいぜい1回か1回半ぐらい。小説か詩をひとつ決めて、その作品や作家、あるいはその作品が属する時代様式など、文学史の知識について簡単な説明をします。その後、原書を読み始めるわけですが、たとえば20章ある小説ですと、各章ごとに担当者を決めて、各回ごとに2、3名ずつ発表をさせます。

発表内容については一応ガイドラインがあり、まずあらすじを確認する。物語を要約するわけですね。そして登場人物を確認する。ある章にどのような登場人物が登場するかなど、客観的にわかることを確認しながら、構成上の、あるいは構造上の特徴を考えることを学生に求めるわけです。それを通して、テキストをどう読むかということを覚えてもらいます。それから、一次・二次資料の検索・収集法、ハンドアウト作成法、プレゼンテーションの方法、質疑応答の方法、これは聞く側の立場からの質問の仕方なども含めて教えます。

最初の1、2章は私が発表を担当します。つまりこうやるんだよという見本を見てもらうわけですね。つづく章からは担当の学生が、最初に見た私のやり方に基づいて見よう見まねで、もちろん少々違ってかまわないのですが、実習していくわけです。担当していない学生はそれを聞きながら、教員と一緒に、その回の担当者のあら探しをして行きます。もちろん感心したらほめてもいいわけです。このように能動的に参加する、あるいは他人の発表などを自分に置き換えてみるというプロセスを通して、本の読み方、専攻に進んだら行うであろうテキストの読み方を練習してもらいます。

夏休みにはレポート作成を課題として出します。これは課題作品を自分で好きに選んで良いというものです。春学期に取り上げた作品と同じテーマを持つものなら、文学作品、映画、演劇、マンガなどなんでもよいから選んできなさいと、申しわたします。たとえばブラム・ストーカーの『吸血鬼ドラキュラ』を取り上げていた年の場合には、夏休みの課題作品は吸血鬼が出てくるものなら何でもよい、というように決めるわけですね。吸血鬼が出てくる小説とは一体どういうものなのかということは、それまでに二次文献を通して典型的な研究テーマがわかっているはず。自分で何とかできそうなテーマで、吸血鬼のモチーフを取り上げている作品を何か選んで来い、と学生に言うわけです。もちろん春学期に取り上げた作品をそのまま選んでもかまいません。ただし、必ず複数の二次文献を使用するといった制限をかけます。

そして秋学期になりますと、まずレポートを回収しまして、

添削して返します。返しながら、クラス内で講評し、赤が入った点に関してはすべて修正することを前提に、今度はレポートに基づく口頭発表を学生に課します。これが秋学期を通して行うことです。赤が入った点に関しましては、まあ坂本の指摘ももっともだというところは直してもらうわけですが、私のコメントに関して学生から抗議してくることもあります。「先生、ここについて非常に厳しいことが書いてありますが、僕はそういうつもりではありません。先生の読み違いです」と。そういうことはまああるわけですが、しかし「一生懸命読んでいる人間が読み違えるような書き方をしたほうが悪い」というのが私の対応です。つまり、「寝ぼけ眼で読んでもはっきりわかる、そして目からウロコが落ちるようにおもしろいことが書いてあるレポートにしろ」というのが私の要求なわけです。

このように学習のプロセスとして、まず春学期に文学作品を題材にとって、学習スキルの実習を行う。そして夏休みにはその習得したスキルを、レポートを書くことによって独力で運用してもらう。秋学期は、その自力で運用した結果について反省して、もう一度再構成し、さらに発表の場で再度点検するというを行うわけです。

学生の実力差と時間的な問題

こういった演習では一応目的を設定しています。まず、コンテンツに関する目標としては「典型的な方法論を用いて文学作品を読むことを能動的に体験してもらう」ことです。そしてもうひとつは、「大学での学習に必須の各種スキルを習得してもらう」ことです。こういった目的があっても、やはりいろいろな困難に突き当たるわけでして、ここでは今後の課題として二つお話ししたいと思います。

ひとつは、論理的に文章を構成する能力に関して、学生間の差が極めて大きいということです。つまりレポートを採点しますと、Aが3割、Bが1割、Cが6割といったことになりがちです。Cがつく学生に関しては、端的に言いますと、論理的な日本語センテンスが書けない。論理的なレポートでも論理的なパラグラフでもなくて、理屈の通ったセンテンスが書けないわけです。それに赤を入れたり、口頭で注意したりすると、注意されているという事態はもちろんわかってもらえるのですが、注意されている内容についてはわかってもらえないことも多い。これは私見ですが、聞いてみると、そういう学生は読書量がかなり少ない。読書をすればそう

いう力が身につくというわけでもありませんが、読書量が不足しているせいで、規範的なスタイル、文章は普通こういう風になる、というスタイルがあることがしっかりと刷り込まれていないようです。したがって、「ほら、おかしいだろう」と言われても、「そうなんですか……」という反応が返ってくる傾向が強いように思えます。

もうひとつの課題は資料検索・収集の実習に割ける時間が限定されるということです。たとえば、学生を引き連れて図書館をツアーすることなどができにくい。それをやると1回の授業がまるまるつぶれますし、1回やればすむというものでもないで、これはなかなか手が回らないところです。

そういった経験をもとに一般論を言うなら、私見では、日吉での演習授業の目的は二つにまとめられるだろうと思います。ひとつは、大学で学べること、大学という環境がもつポテンシャルを能動的に体験してもらうことです。「大学の勉強はこういうもので、実際にやってみるとこんな具合だ」と。その結果、気に入ったか、あるいは気に入らなかったがわかる。やってみて初めて自分の適性がわかるということがあるだろうと思います。それを専攻に進級する前にいち早く行うということがひとつのポイントでしょう。もうひとつの目的は、大学での学習に必要なスキルの訓練を、能動的な学習のプロセスを通して実体験し身につけてもらうことです。

今後の課題と期待

こういった目的を想定したうえで、今後の課題を考えてみたいと思います。まずは内容の継続性です。これはすでに取り上げましたが、「特論」は各専攻設置科目への継続性をもっています。ですからあまり問題はなさそうです。「総合教育セミナー」に関しては、専攻が対応しているとは限りませんので、先ほどご説明しました三田設置の演習科目、あるいはこれはまだ構想上のものですが、「専門教育セミナー」といった科目への継続性が想定されるわけです。また将来的にはこうした科目の副専攻化も課題だろうと思いますし、先生方のお話にもありましたように、学部を横断しての副専攻の履修といったことも非常に望ましいのではないかと思います。

次の課題として、これは深刻だろうと私は思っているのですが、対象学生の見直しということがあります。私の授業では最初に選抜試験をしたとお話しましたが、これはそういった演習科目が積極性をもつ少数の学生を対象とすることを

前提としています。しかしながら学習スキルの訓練は、新入生全員に有用かつ必須のものです。したがって、従来型の演習科目、つまりやる気のある人に専門科目を先んじて受けてもらうといった演習科目と並行して、学習スキルの習得を主目的とした演習科目を、必修科目として設置することを検討すべきだろうと思います。ちなみに文学部ではこれを現在検討中です。

設置方法ですが、必修化のためにはいろいろな困難が想定されるわけで、まず教室と教員の確保が難しい。たとえば1クラス30人ですと30クラス、そして20人だと45クラスとなります。また学習成果を各種授業で秋学期に実践できるように、春学期集中が望ましい。さらにクラス間・教員間で大きな差異が生じないように、カリキュラムの明確化、あるいは教授法のマニュアル化が求められます。そして必修科目ですから、評価法の確立も必要です。文学部では、こうしたことに関してすでに前向きに検討しております。

商学部「総合教育セミナー」

種村和史 最後に商学部の少人数教育につきまして、私からご説明いたします。伊藤先生のご調査で、私も初めて知ったことなのですが、商学部では早くも1960年代から「研究会Ⅰ」という科目名で相当数の少人数教育が展開されていました。その担当教員数は14人から、多い年で22人ということです。ただし、この頃の実態については私は詳しく調べておりませんので、次の段階をご紹介しますと思います。

商学部では、大綱化によるカリキュラム改革が1993年に行われ、そのときから「総合教育セミナー」という科目名の少人数教育がスタートし、いまに至っています。開講形態としては、総合教育科目のⅠ類、Ⅱ類、Ⅲ類にまたがっております。Ⅰ類が自然科学、Ⅱ類が人文社会科学、Ⅲ類が学際的・総合的な科目で、どの科目でもこの総合教育セミナーを置くことができます。ちなみに今年の総合教育セミナーは28コマ開設されておりまして、担当教員の内訳は自然科学9人、人文社会18人、三田教員1.5人となっています。三田の専門の先生もこの総合教育セミナーを担当していますが、1.5人ということで担当率は非常に少なく(0.5は、日吉教員との共同開講)、事実上、日吉の先生が主体になって開講しています。

総合教育セミナーの目的は3つあります。第一に教員の

専門分野についての教育を通じて、第1、2学年という早い段階で大学で学ぶとはどういうことかを知る。第二に、3、4年で展開されるゼミと似た形式の科目を日吉でも開講する。この背景には、設置検討の段階で三田の専門課程の先生のなかで必要性を強く訴える方がいたということで、これが開講に結びついたようです。それから第三に、クラス担任という制度が機能を果たさなくなってきた、学生と教員とのつながりが希薄になっている。それを何らかの形で取り戻したい、つながりを確保したいということです。

そういう目的はあるわけですが、その実際の授業の共通の到達目標や手法などは特に決められていません。全学生が履修することが望ましいとは考えられましたが、担当教員の数が少なかったために、実際にはそれは実現されていません。ですから、一部の学生が総合教育セミナーを取るという形に、いまはなっています。

そこから問題点が出てくるわけです。共通の教育目標がないということで、総合教育セミナー全体として何をやるべきかが見えていない。個々の教員の自主的な努力に任されているというのが現状であるというのがひとつの問題点であろうと、われわれは認識しております。

日吉の全教員が担当

ここまですが現在行われております総合教育セミナーですが、商学部では現在、カリキュラム改革が議論されており、来年度からは総合教育セミナーを日吉の全教員が担当することになりました。これは商学部の大きな変化ということになると思います。今年が28コマですが、来年度は46コマ置かれる予定で、倍ではありませんが、かなり劇的な増加になります。この拡大の理由は、ひとつは先ほども出しましたが、商学部でクラス担任制度が機能していない状況で、「教員と学生との人間的接触を重視する」という商学部の理念を実現するための措置として必要であると考えられました。それからもうひとつは、このカリキュラム改革を行うにあたって、教員にアンケートを取ったところ、多くの教員が共通して提起していたのが、学生の問題発見・問題解決能力を早い時期から養成する必要があるということです。それを受けての拡大ということです。

開講の形態は、現在の形態をそのまま受け継いだものですが、授業のタイトルや内容や概要を研究教育委員会に提出します。その内容ががらりと変わる場合にもその都度申告

して、それが最終的に教授会で承認されるという手順を踏みます。それから来年から商学部でも通年半期制を取りますが、通年・半期いずれの形で開講してもよいことになっています。開講コマ数は増えたものの、なおやはり全学生を受け入れるだけのキャパシティはないため、必修ではなく選択科目です。

半ば義務的な形で日吉の全教員が授業を担当するということで、それに向けての取り組みも行われています。ひとつめは勉強会です。授業のノウハウを教員間で共有するために、現在、総合教育セミナーを担当している先生方が自分の経験を紹介して、情報交換する場をもちました。この勉強会は引き続きこれからも行われることを私は期待しています。それからセミナーについてある程度共通の認識をもとうということで、ガイドラインが作成されました。その内容として、講義ではなく、学生の自主的な勉学やプレゼンテーションを中心に授業を組み立てる。内容は教員の専門や、あるいは専門ではなくても、学生に広く資するものを扱う。それから実際の授業方法は、学生の自発的な勉学を奨励すること。レポートの書き方の基本を学べることが望ましいといった内容です。

以上をまとめますと、商学部の総合教育セミナーは第一に日吉の教員の専門を教える、第二にスタディ・スキルズといますか、学習・研究の基本を学ぶ。そして第三に学生と教員との人間的な関係を重視した教育を行うという、3つの柱をもっています。

3、4年の「関連課題研究」

総合教育セミナーは、商学部における学習・研究の導入的位置付けを持っているのですが、その後の展開としては、三田の第3、4学年で設置されることになっている「関連課題研究」という新しい科目とつながるのではないかと思います。この「関連課題研究」とは広い意味での商学、“専門の横串を刺す”という表現を使っていますが、複合的な要因が絡みあって、変化を遂げている現代の状況においては、商学部の専門的な知識だけではなく、幅広い分野の知識が必要であるということで、今回のカリキュラム改革で新たに設けられた科目です。

つまり、商学部の専門だけではなく、いろいろな文化、社会、あるいは自然科学などについての幅広い知識が必要であり、そこに日吉の教員の協力が必要であるということです。

教員の専門に近い教養教育をすることによって、幅広い知識を学生に身につけてもらうということが授業の主旨です。ですので、この授業はまだ始まっていませんが、おそらく、1、2年で展開されます総合教育セミナーとつながるような形で動いていくのではないかなと、これは私個人の推測もかなり入っておりますが、こう思います。

今後に対する要望

実は、私はこの総合教育セミナーを今年初めて担当したばかりで、経験はまったくありません。ですので、今日はひたすら拝聴する立場なんです。素人の考えとして、今後の要望についてお話したいと思います。日吉の商学部の全教員がこの総合教育セミナーを担当することになりましたが、実際のところ、教員側にはかなりの困惑や不安がありました。実は私もそのひとりで、自分の専門分野を題材にして学生の問題発見・問題解決能力を養うというコンセプトが本当に有効に機能するのだろうか、ちょっと疑問に思ったところがありました。

私の研究分野(中国古典文学)というのは非常に特殊なもので、そこで用いられている研究手法もかなりマニアックなものです。そのような特殊な題材を用いて、商学部の学生に必要とされる問題発見・問題解決能力を養うことができるのだろうかとかかなり不安に感じていたわけです。今年1年間、総合教育セミナーを担当して、いろいろな関連文献を読んだり、実際に授業を担当してみて、そのような困惑はかなり解消されたと思自自身は思っています。問題発見・問題解決能力の養成に関する文献を読み漁って、私の知らない研究ノウハウを知って大いに刺激を受けたり、あるいは私が自然に用いていた研究手法というのがオーソドックスなものだったということがわかって、かなり嬉しかったりということもありました。問題発見・問題解決の手法の大本は分野を超えておおむね共通していますから、私が自分の専門に近いところをテーマにしても、それなりに授業を行うことはできるだろうといまでは思っております。

ただ、大本は同じと言いましても、やはり各専門での実際の現れ方は非常に多様だと思います。たとえば、私は中国古典文学を専門にしておりますが、どういうふうの研究するかと言いますと、ひとつのことを調べるときには関連の文献などを自分の周りに積み上げて壁を作るわけですね。で、そのなかに頭を埋めて、文献を片っ端からひきまくるとい

孤独な作業を続けていくなかで、だんだん脳がトランス状態に入っていく、そこでようやく解決の道筋が見えてくるというような手法を取っています(笑)。その過程でさまざまなことを発見するわけですが、それをだれに伝えても大抵、理解してもらえない。それでだんだん自分を励ますために、独り言をつぶやくようになります。これは私だけではありませんが、私の周りの同業者の多くは独り言が多い人間で、気がついていたら独り言をつぶやいていたというようになれば初めて研究者として一人前と呼べるのではないかと、私などは思っています(笑)。

ですから、先ほども言いましたように、問題発見・問題解決の手法の大本のところはどの分野でも同じなのですが、ただ学生に提示するときにはやはり生の形で教えるわけにはいかないと思います。ある程度、自分の研究手法の足りないところを補い、それから過度な部分を削り取って、加工し一般化する必要があると思います。ただ大学の教員というのは自分を客観化したり、一般化するのが不得手な人間が多いと思いますので、そのあたりをうまく解決する必要があります。

それからこれは先ほど熊倉先生もおっしゃっていましたが、私たちの世代は、研究の方法論を大学教育のなかで教えられておらず、見よう見まねで身につけたところがあります。自分の研究方法についてはもちろん自信を持っていますが、それがどれだけ普遍的なものなのかということについては自信がもてないところもあります。そういうところから総合教育セミナーのような授業を担当する不安が起こってくると思います。こういうふうな授業を展開していくためには、教員同士が自分の手法を客観化して見られるような、他の先生の経験や意見を聞いたりできる場を積極的に設けていくことが必要ではないかと思っております。先ほど商学部では、総合教育セミナーについての勉強会を開いたと申し上げましたが、これは非常にいいことだと思っており、今後もこのような機会をどんどん作っていくべきだと思います。また、こういう勉強会は学部ごとで閉じられている必要はまったくないわけですから、教養研究センターがイニシアチブを取っていただければ非常にありがたいと思っております。

ディスカッサントからの Question

種村 各学部で実施されている少人数セミナーの現状と考え方についてひと通りお話いただきまして、その多様性とさ

まざまな問題が見えてきたのではないかと思います。これについてディスカッサントによる質問・意見をいただき、その後、全体的な討議に入っていきたいと思います。本日は4名のディスカッサントにおいでいただいています。まず近藤先生、よろしくお願いいたします。

コンテンツとスタディ・スキルズ

近藤明彦 先生方、ありがとうございます。各学部での設置のいきさつやどのような理念や目的で成り立っているかについて、詳しいお話をお聞きすることができて、非常に参考になりました。

私が先生方のお話のなかで、これが問題点なのかなと考えたことは、ひとつは、少人数セミナーで何を行うのかという内容、つまりコンテンツですね。たとえば学部によっては、三田の先生が設置して専門に導く学問分野もあるでしょうし、そうではないものもある。あるいは何をテーマに取り上げているのかというコンテンツの問題もあるのではないかと思います。法学部や経済学部ではどちらかというと副専攻的な内容にも入ります。商学部もそうかもしれません。そんなふうにな何を対象とするのかということについて、少し議論しなければいけないのではないかと思いますし、それが教養のあり方とつながってるところもあると思います。

もう一点は、熊倉先生がおっしゃいましたスタディ・スキルズに関してです。熊倉先生は日本の大学で論文の書き方や勉強の仕方を教わっていなかった、そしてスタディ・スキルズ、学問の技法は非常に大事だとおっしゃっていました。私が考えるに、やはり高校までの学習ですと、教科書という国が定めたある程度スタンダードなものがあって、それを覚え



近藤明彦氏

ていくという記憶中心の勉強の仕方だと思います。それが大学に来ますと、そういうものを批判的に読むというクリティカルリーディングが中心になってくる。その批判的な見方がないとするならば、その言語化されて教科書になったものは決して変わらず、絶えず同じもの、進化がないということだと思います。クリティカルなものの見方をして、そこに批判的な精神をもって、新たな視点を入れていくことによって、想像性が出てくるわけです。ここはやはり大学での勉強の仕方として、非常に大事なところではないかと思うわけです。

そうしますと、どういうものを勉強するのかというコンテンツと、それを学問的な思考のプロセスを用いていかに勉強していくのかということ、この2点が非常に大事になるのではないのでしょうか。私は教養研究センターで「スタディ・スキルズ」という授業を担当しておりまして、これは複数教員が担当するというので、各学部の少人数セミナーとは若干違う形ですが、ここでは座学の講義科目とのセット性を重視しています。つまり、対象となる学問分野についてはやはりそちらの講義科目を取ってほしい。そこで、言語化されて知として確立されたものを聞く。そして、その講義科目の授業で見たもの、聞いたもの、あるいは経験したもののなかからテーマを選び、さらにクリティカルなものの見方をして、自分でさらに勉強を進めようというのがスタディ・スキルズの授業です。そういう対応関係を取っているんですね。教養研究センターは学部には所属せず、比較的自由的な発想が活かせるため、この授業でもユニークな考え方が展開できるのではないかと思います。

今日は学生諸君もたくさん来ていると思います。この授業との関連も含めまして、コンテンツの問題と学問の仕方について、学生諸君がどう思っているのか、ぜひ聞いてみたいと思います。

必修化が含む課題

長谷川由利子 私自身、商学部の総合教育科目で生物学という授業の他に、ここ何年も総合教育セミナーを担当しております。その総合教育セミナーの運営方法について、たいへん参考になります。ご意見を多々拝聴できまして、本当に感謝しております。

こうした少人数セミナーには、近藤先生もおっしゃいましたように、コンテンツの問題、あるいはスタディ・スキルズの問題など、いろいろな問題があると思います。私自身は、そ



長谷川由利子氏

のなかでも必修化すべきかどうかというところにたいへんに興味をもちました。現状では、少人数セミナーに参加しているのは、意欲のある学生というか、能動的に学習したい学生だと思います。そういう学生は、ちょっと言葉が悪いのですが、ある程度放っておいても、道筋さえつけてあげさえすれば自発的により高い技術を身につけることができると思います。問題はそうではない学生ですね。私個人としては、スタディ・スキルズのようなもの、あるいは双方向のコンタクト能力を身につけさせたいと思っているのですが、意欲が不足している学生をどうやってその方向に導いたらいいのか。そうした学生たちにそうした授業を取らせるべきなのか、あるいは必修化にしたほうがいいのかと思うのかなど、そのあたりのご意見を学生さんたちにうかがいたいと思います。

また、キャパシティの問題が先ほども出てきましたが、必修とした場合、全学部の教員が全学部の学生を対象にこういう授業を行うことが可能かどうかという問題もあると思います。そのあたりを含めまして、皆様のご意見をうかがえたらと思っています。

社会に出ても役立つスタディ・スキルズを

種村 どうもありがとうございました。今日はディスカッションとして2名の学生をお呼びしています。経済学部の境先生の自由研究セミナーで「大学教育について考える」というテーマでいろいろな調査をして報告書をまとめ上げたおふたりです。学生の視点から問題提起をしていただきたいと思います。それではまず経済学部3年の田倉麻理さん。お願いします。

田倉麻理(経済学部3年) 今日は貴重なお話をありがとう

ございました。境先生の自由研究セミナー「大学教育について考える」では、大学生活のなかでも、慶應大学でいうと日吉の期間、つまり1～2年次に焦点を当てています。日吉で特に勉強する一般教養、英語、第二外国語、専門科目の4つの視点から、日吉であるべき教育とは何だろうということについて考えてきました。何しろ経済学部 of 学生なので、経済学部のことに偏ってしまうところもあるかと思いますが、簡単に私がなぜ自由研究セミナーを取るようになったのか、それから今日のお話を聞いて考えたことについてお話しさせていただきたいと思います。

自由研究セミナーを知ったきっかけは、大学に入学して初めての日に行われた学部長の細田先生の講演です。そこで、経済学部には自由研究セミナーというものが設置されていて、3、4年生の研究会の前段階のようなものなので、興味があるのなら受講してくださいと紹介がありました。興味を抱いた私は講義要項などを見て、履修することにしました。

履修するときに気づいた点があるのですが、経済学部の一般教養の履修上の決まりで、Ⅰ系、Ⅱ系、Ⅲ系と分かれています。Ⅰ系、Ⅱ系はそれぞれ必修単位が決まっています。そこから取らなくてはいけない数が決まっています。しかしⅢ系というのは、Ⅰ系とⅡ系を取って余ったものというところなのですが、とりあえずⅢ系があるという感じがします。自由研究セミナーという少人数セミナーはⅢ系の中に入ってしまったいて、取りたい人は自主的に取るけれども、取らなくてもいいという感じなので、本当に興味のない人は取らないということがそこでわかりました。最初に細田先生から紹介があったにも関わらず、履修上ではそのような扱いになっているということで、一体学部では自由研究セミナーをどのような位置づけで扱っているのかと、非常に不思議に

思いました。

先生方のお話を聞いて考えたことですが、先ほど伊藤先生のお話では、自由研究セミナーを通して、学生の「考えを話す」「まとめる」という力を伸ばすようにご指導なさっているとありました。私が三田に行って感じたことは、まさにこの能力が三田では必要だということです。この「考えを話す」「まとめる」という能力は、机の上でがんばって勉強してできるというものではなくて、話し合ったり、話を聞いてくれる相手がいてこそできるものです。日吉の少人数授業でこういう能力を十分に訓練しておけば、三田に行って研究会が始まったときに十分に役立つと思うので、この点を少人数授業で強化することは重要ではないかと思いました。学部ごとに副専攻までに高めるか、そうではないかということはあるかと思うのですが、まず中心となる核として、自らの意見を話す、まとめるというものは、学生時代だけではなくて、社会に出てからも十分に活用すべきものであると思うので、この点を少人数授業で中心となる核として教えていってはどうかなと思いました。

最近就職活動を始める時期になって、いろいろな企業の方にお話を聞いたりしています。いろいろな方が共通しておっしゃっているのは、「会社側としても社会としても、学生時代に得た知識は社会のプロから見れば微々たるもので、そんな知識を社会は最初から完璧には求めていない。求めているのは何かというと、いかに与えられたことを確実にできるか。また自分で自分の考えをまとめて発表できるか、それから知らないことにでもどんどんチャレンジできるかということだ」ということです。ですから、こういったことを養う場として、少人数授業というものを今後運営していくべきではないかと私は思います。

上と下からのアプローチを

森本陽介(経済学部3年) こんにちは。今日先生方の各学部のいろいろなお話を聞いていて、ひとつ共通する問題意識があったと思います。それはスタディ・スキルズがとにかく学生に欠如しているという問題点です。結局やる気のある学生というのは、好きでこういう少人数の授業を受けるんですね。語弊があるかもしれませんが、やる気のない学生に学ぶための技法を身につけてもらうにはどうすればいいかということについては、僕も自由研究セミナーですずっと考えていたのですが、自分なりの案としてはふたつのアプ



田倉麻理氏

ローチがあると思うんですね。上からのアプローチと下からのアプローチの2方面です。上からのアプローチというのは教員サイドから学生に対して働きかけるというもので、下からのアプローチというのは学生側から自ら主体的に行うというイメージをしてもらえばいいと思います。

まず上からのアプローチについてお話したいと思います。昨年、僕たちは自由研究セミナーの中で経済学部生の100人を対象にアンケートをしたのですが、そのアンケートの結果を分析しますと、高校教育と大学教育の間に断絶があると感じている学生が非常に多数います。その声を分析すると、「高校までは先生が黒板に書いたものを写して、それを覚えて、テストを受ければいい。大学になって、突然レポートを書け、プレゼンテーションをしろと言われる。そう言われても、どうしていいのか、さっぱりわからない。学校側もやれやれと言うだけで、どのようにしたらいいかという方法論は何も示してくれない」というものです。ですからまずは少人数セミナーうんぬんの前に、そういう方法論を学ぶ場を用意すべきではないかと思います。

いろいろな大学のケースを分析してみたのですが、東京大学の教養学部では数年前にベストセラーになった『知の技法』という本を使って、スタディ・スキルズ教育を行っています。その本を読んで、自ら知を見つけ、調べ、結論を出す。そして学問とはどのようなものなのかを知り、発表議論能力を見つけないという必修授業が用意されているらしいんですね。

まずはそういう大人数の授業でもいいのですが、作文を書いたりという授業を大学でもやるべきなのではないかと思います。こういうことを先生に対して言うと、「いや、それは高校教育まででやることだ」と言うんですね。最近では学力の低下が問題になっていて、たとえば大学生なのに分数の計算もできないというような記事が先日新聞に載っていました。「これは高校まででやっているんだから、大学では受けられませんよ」などと悠長なことを言っていると、結局問題はまったく解決されないままなんです。ですから、大学でもたとえば文章を書くなど基礎的な国語能力を養成する場を設けないとダメなんじゃないでしょうか。実際、学生のアンケートにもそういう授業を設けてほしいと思っている人が4割ぐらいいます。そういう声に応じないといけないということがまずあります。これが教員のほうから働きかけるという上からのアプローチですね。

次は下からのアプローチです。学生が本当に興味をもっ



森本陽介氏

て自分たちで主体的に動かないと、身につかないということもまた事実です。僕は中学校の社会の授業で半ば強制的に卒業論文を書かされました。はっきり言って、最初聞いたときは面倒くさいというのが感想で、最初はいやいやながらやっていました。僕がそのときに扱ったテーマは「サッカーと地方活性化」でして、ちょうど日本でワールドカップ開催が決まったときでした。ところが、たまたまちょっとその問題を取り上げて取材をただけなのに、取材を受けたほうの反応がすごくて、「キミはよくそんなことを研究しているね」と言われて、たとえばワールドカップのプレミアチケットをただでもらったりしました(笑)。それで、こういうことをやったらすごくおもしろいんじゃないかなと思うようになったわけです。そういうことがきっかけで、少人数授業を受けたり、論文を作成したりするようになったんです。

今日は会場の後ろのほうに少人数形式の授業を受けている人がたくさん来ていると思いますが、最初から「勉強するぞ!」と意気込んで履修した学生はおそらく10人に1人いるかいなかで、ごく少数だと思います。ほとんどの人は、友だちが取るから取るとか、他に取るものがないから取るとか、しょうがなく取ったとか、そういう受動的な理由だと思います。でも、そんなふうに最初はやる気がなくても、やってみて実はおもしろかったと言って、その後も取るというケースが多いと思うんです。

先生方のお話のように、文章の書き方だとか、こういう能力を身につけなければいけないといったことに重点を置いて宣伝してしまうと、学生は「何かこれは面倒くさそうだな」と思ってしまわないでしょうか。別に少人数授業なんか受けなくても、大多数の学生は「授業でノートだけコピーすればいいや」と思っちゃうと思うんです。自分もそうだと思うんです。逆に「こんなふうにおもしろい」と、言葉は悪いですが、だまして履修させれば、最後はおもしろかったという

ふうには学生は盛り上がると思うんです。そして、たとえば他の学生に「みんな、これを取ったほうがいいよ」という口コミが広まって、みんなが主体的に取るようになるんじゃないかと思います。もちろん坂本先生がおっしゃっていたように、最初にやる気がない学生が多いから厳しくして人数を絞ってやるという方法もあると思います。でもそういうやり方だと、結局は一部の人がしか取らなくなってしまうと思うんです。そうでなくて、もう少しおもしろいということを前面に出してやったほうが、全体的に少人数授業が広まるためには有効なんじゃないかと思います。

種村 どうもありがとうございました。いま4人のディスカッサントの方々に、さまざまな論点を提示していただきました。コンテンツとスタディ・スキルの問題。やる気のある学生、セミナーを取る学生はもともとやる気があって、放っておいても大丈夫だけれど、そうではない学生をどうするかということとからめての必修化の問題。それから上からのアプローチと下からのアプローチなどなど、さまざまな論点が出てきたと思います。考える、まとめるといったものが核となるべきだというご意見もいただきました。それにつきまして、まずパネリストの方で何かそれに対してのお答えはありますか？

ディスカッサントへの Answer

スキルよりもテーマを重視すべき

朝吹 私の報告のなかではスタディ・スキルのことについてはほとんど触れませんでした。他の方のご報告にもありましたように、スタディ・スキルズというものを最低限の能力として身につけてほしいという気持ちは、私も確かにもっておりますが、一方で、その問題はそれとして考えるべきだとも思います。

熊倉さんがおっしゃったように、私自身も論文の読み方や書き方を特に誰から教わったわけでもなく、自分で興味をもって研究書を読んだりして、自分で身につけていったというようなことが経験としてはあるわけですね。いまの意見にもあったように、私も結局、自分の関心のあるテーマのほうがより重要なのではないかと考えております。履修する学生が何かおもしろそうだから、もうちょっとつっこんで勉強してみたいと思えるようなテーマがあり、履修者と教育サイドがひとつの教室で出会って、そのテーマを追求していく。そのなかで当然レポートや報告もあるでしょうから、そこで実際に

報告の仕方やレポートの書き方、あるいは研究書の調べ方などを伝授していく。これが私が教育研究会で取った手法です。

スキルと内容のふたつをひとつにするというのはちょっと無理があるのじゃないかなと、私は思います。つまりスタディ・スキルズを主に教える授業をまた別にちゃんと設けておいて、そしてこの少人数セミナーではやはり教員側の教えた意欲と学生の教わりたい意欲がうまく合致するような形が理想的なのかなと、私個人はそう思います。

身体体験を通して学問のおもしろさを教える

熊倉 朝吹先生のお話にほぼ賛成なんですけど、私自身はスタディ・スキルズはあくまで技術的な方法論の問題であって、学問のおもしろさはその先にあると思うんですね。大学1年生になって、最低限本の読み方や論文の書き方を身につけてほしいとは思いますが、それだけで満足するのではなくて、本当におもしろいのは、他人と議論しているなかでどうやって自分の思考のオリジナリティを編み出していけるかということだと思います。そのためには、やはり他者と絶えず相互批判的に切磋琢磨しあわないといけないと思うんですね。

また、先ほど、坂本先生からいまの学生は日本語能力がないというご指摘がありました。私も教えていてそれを痛感するんですが、私自身はただそれを嘆いてだけいてはダメだとも思っています。私は45歳ですが、私の年代ぐらいまでは活字メディアが主で、本もけっこう読んでいたんですね。もちろんマンガもありましたが、まだメインのメディアではありませんでした。今の学生さんの場合は、メインのメディアというところからかといえば書物などの活字メディアではなく、マンガやアニメ、さらにはデジタル・メディアですね。そうしたときに、大学に入って突然、無理矢理書物だけで理論的な思考をしろ、書物だけを通して学問のおもしろさを見つけないと言っても、なかなか無理があると思うんです。

これは持論なんですけど、書物を通した学問のおもしろさと同時に、やはり何か身体で体験することに着目すべきではないでしょうか。たとえば外に出て行ってフィールドワークをするといった体験と、理論的探究とを絶えずカップリングする形で授業を組み立てていくと、たとえば書物だけから入るとすぐつまらないと思っている学生であっても、体験から入っていくことによって、逆にそのテーマに興味をもつ

て調べてみようかな、本を読んでみようかなということにつながると思うんですね。そういった教育方法をやはり大学でも工夫して導入していかないとダメだと思っています。

スタディ・スキルズ習得は裏の隠し手

伊藤 森本君のお話、おもしろくうかがいました。先ほど私は発表のなかでスタディ・スキルズ的なことをかなり言いましたが、私の自由研究セミナーに参加した学生に聞けば「先生、そんなことを考えていたの?」と言われるぐらい、実はこれはひとつの隠し手でして、あまり学生には言わないんですね。ふだんはいかに学生を引きつけるかに苦心しています。まず講義要項を書くのに3、4日考えて、それをできるだけわかりやすくする工夫を凝らしてみます。まずテーマに関心をもっていただかないと、こうした少人数セミナーはうまく進めることはできないんです。学生のなかには、森本君のように中学生のときに目覚めてやってきた人もいるし、あるいは大学に来てようやくこんなセミナーがあるのかという人もいます。後者の人たちに、いきなりレポートを書けといっても、これは無理な話なんです。ですから、自由研究セミナーでおもしろいテーマをやりつつ、テキストをまとめたり、自分の考えを発表したりするためのテクニックをだんだんと教えていきます。逆に言うと、本の線の引き方から、線を引いたところをどうやってつないで口頭で喋るかということまで一応指導しているつもりです。そのことによって、自分がだんだん喋れることのおもしろさを覚え、そのうちにテーマにはまっていく。そしていよいよフィールドワークもやってみようというようなところにつながっていけばいいと思っています。

ですから、スタディ・スキルズ的な要素は隠して外に出さずにセミナーを進めていくのが理想です。今日はどのようにしてセミナーを行っているかということ話を話してほしいということで紹介したわけで、実際にはもっとおもしろいことをやっています(笑)。

1年前期にスタディ・スキルズ授業を

坂本 スタディ・スキルズを教える少人数授業と、あるいはもうちょっと違った従来型の教養目的の授業はやはり2年本立てにするしかないだろうと、私も思っております。というのは、先ほどもお話しましたが、何と言っても、専攻の演習授

業を担当していて、演習がうまく成立しにくいほど学生間に学力差があります。しかしこうした授業について来られない学生にしても、中学・高校や受験での勉強ができる・できないという意味での学力不足とはまた違うわけです。そこに欠けているのはやはり基本的なスキルです。そのスキルも、聞いたら覚えられるというものではありません。すでに実習で体に身についたスキルを持っていて、しかもそれを面白がって使っている学生と、スキルがなくて茫然としてしまっている学生とでは、事実上、一緒のクラスで勉強することはできません。ですからその隙間を埋めるためにも、できれば1年生の早いうちに、覚えるべきことは覚えて、無理にでもやらなければいけないことは無理矢理やらせてもらって、勉強してもらえないだろうと思います。

と同時に、これは先ほども説明いたしましたが、文学部の特殊事情で、2年生から三田に行って専攻に入ってしまう。学生は2年になるときにたいへん大きな選択をするわけです。つまり2年に上がる段階で、残りの3年間、自分がどのような学生生活を送るかを決めることになるわけですね。そこで自分のツボにはまった、面白がれるような専攻を選べば、それこそ遊園地が好きでディズニーランドの年間パスをもっているのと同じような感覚で大学に来るという境遇に自分を置くことができる。どういう3年間を過ごすか、これは非常に大きな分かれ目ですね。その分かれ目で難しい選択をするためには、講義を聞いていただけではダメなわけです。

私の学生時代の同級生、上級生、下級生。教師になってからは担当学生を見ていて、いくらでも例があるのは、「私のやりたかった〇〇はこんなものじゃなかった」という学生です。「僕がやりたかった英文学はこんなものじゃなかった」という学生の話をよく聞いてみると、その学生は高校で英語が好きだった、英語のテキストを読むのも好きだったけれど、別に文学が好きでもなんでもなかった、と言います。やはり知らないで選んでしまっているわけです。実体験で選んでいない。

ですから、やはり少しでも能動的な体験をしたうえで選ぶためには、少人数の演習形式の授業を複数受講する必要があります。それともどうしたらいいかわからない状況で受講するのではなく、最低限のスキルを身につけたうえで参加するのが理想的な状態であろうと思います。もし文学部に教養課程が2年あれば、かなり余裕があると思いますが、1年しか無いなら無いで仕方がないということで、個人的な意

見ですが、前期にスタディ・スキルズの基礎をやって、後期は複数の実践の場に参加してもらう。これが理想的ではないかと思います。

先ほど長谷川先生から、少人数授業が全員必修でできるのかというご指摘がありました。これはいかにもたいへんそうで、学事センターの方々が教師や教室の数などを心配なさると思いますが、これはどうしても必要なことなので、何年後かに校舎が建つのを待っていてもしょうがない(笑)。諦めてしまったらどうしようもないと思います。

少人数セミナーは専門家養成か？(Q & A)

種村 どうもありがとうございました。それではそろそろ会場の皆さまからもご意見をおうかがいしたいと思います。コンテンツやスタディ・スキルズを両立できるのか、両立させるとするとハードウェアの問題も出てくるなど、さまざまな問題が錯綜しておりますが、それ以外の視点ということでもかまいません。今日はさまざまな視点をもちよって考え直す機会をもちたいというのが主旨ですので、ご自由にご発言をお願いします。

安田健悟(法学部2年) 今日のお話、どうもありがとうございました。教養をもつことの是非についての質問なのですが、主に先生方は教養と少人数セミナー形式授業の両立ということをおっしゃっていたのですが、いまでは少人数セミナー形式授業はスペシャリスト養成の補助的な役割を担っているものが多いと思います。現在では専門性が重んじられることが多いと思うのですが、教養をもつことについてはどうなのでしょう？

西尾修(経済学部) 僕が自由研究セミナーをもってもう20年以上になります。僕の専門はフランス文学19世紀のバルザックでして、経済学部にそういうものに興味をもっている学生がいるかなと考えて、最初のころはいろいろなことをやっていました。先ほど出た論文の書き方といったスタディ・スキルをメインにやっていた時期もあります。ただ、これははっきり言って人は来ない。非常に減ります。

いまの質問にスペシャリスト養成とありましたが、僕はちょっとぎくっとしました。毎年講義要綱を出しますが、一応礼儀はありますから、私の専門はこれだと一応書いておいて、ただそれにはまったくこだわらないと書いています。たとえば「文化／社会／歴史／文学、その発想と感覚」というような題名で出して、授業では社会から文化、歴史などにと

かく好きなことをやってもらいます。テーマはそれぞれ。こちらの希望は、10～20時間しゃべっても飽きないようなテーマをもっていたら、それについて何か発表してもらって、みんなで議論をしようということで、もう決めているのはこれだけです。僕のところに来てくれる学生はけっこういるんだけど、楽しくやっていますよ。あるいは私だけが思っているのかな？ でもその後も集まったりいろいろとつながりがありますから、おそらくは学生たちもおもしろくやっていると思います。

その授業で、僕ははっきり言って、専門家養成なんて気持ちはまったくありません。なかにはそういう先生もいると思います。でも、それは専門に行ってやればいいわけです。そうではなく、総合教育的な枠内で自分のやりたいことをどんどん調べて、発表して、議論して、ケンカしたっていい。そういう授業ってあまりないでしょう？好きなことをやる。僕もどんどんしゃべります。遠慮しませんから。ですから少人数セミナーがスペシャリスト養成のセミナーなら、私はやめますよ(笑)。

安田 スペシャリスト養成の補助的役割というよりは、幅広い見識をもつという目的が少人数セミナー形式授業にはあるのでしょうか？

西尾 ふたつあるんですよ。ひとつは経済学部の場合、簡単に言うなら青田刈りですよ。要するに自分の専門のセミナーにいい学生を集めたいということでやっていた。伊藤さんの説明にもありましたが、経済学部にも最初はそういうのがあったし、けっこう強かったんだけど、やはりそれはおかしいだろうということで、いまはあまりそういう傾向はなくなっただと思います。ですから、ふたつあると思います。

近藤 いまの安田君の質問なんですが、少人数セミナーが大学での勉強の仕方を学ぶことにつながるというところで、専門性という感じでとらえられているのかなと思ったんです。もうひとつは、法学部政治学科に入ったのに、なぜ文学をやらなければいけないのか、という意味合いもあるのではないかなと思うんです。

そこは非常に難しいと思うんですね。これがヨーロッパの大学だったら、専門だけしか勉強しません。ただ副専攻制を取っていますから、主専攻の他に副専攻をもうひとつ選んで勉強しなければいけないという形で、幅を広げるというようなことをやっています。日本の大学も戦前はドイツ系の大学でしたから、専門だけやっていました。しかし、戦後はアメリカ系の大学に変わり、いわゆる一般教養といわれるもの

を学ばなければならない。1993年までは、一般教養3分野12単位36単位という制度が長い時代、続いていました。いま、学力の低下ですとか、本を読まないということが言われていますが、そうだとするなら、逆に大学生になったときに幅広いところを勉強することは、「首根っこをつかまえても」ではないですが、ちょっと必要なかもしれないなど、私は一教員として思っております。

実際には教養はどうすればいいかという議論は、教養研究センターの第1回のシンポジウムのときに交わされました。なかには、「専門を勉強していくと、それを補完するためのさまざまな知識が必要であるから、まずは大学に入ったら一定のところまで自分の専門を勉強しておけ、その先に必要性を感じた時に教養に関連する勉強をしたほうがいいんだ」という意見もあったんですね。ただいまの教育のシステムは積み上げ型なので、まずはその基盤となる教養の幅広いところを最初に身につけておいて、その上にひとつの分野の専門の山を作りましょうということです。ここに出席している学生諸君のなかにも、「なぜこの学部に入ったのに、こんなことをやらなくてはいけないのか?」と思っている学生もけっこういると思うのですが、いまの積み上げ型のシステムだけでなく、むしろ反対のタイプ、一点突破で専門を勉強をしておいて、後で教養を勉強するというやり方もあるのではないかと、私は思います。

出版会の社長の坂上さんがすごくいいことを言っています。教養は一生身につけていくものだということで、「教養は名詞ではなく、教養するという動詞だ」と。教養とは、絶え間なく自分が獲得して広げていくものだというお話をされたことがあったのですが、そこが非常に大事なところではないかと思います。

小淵昭夫(経済学部) 私は経済学部の教員なのですが、なぜかいま、商学部の「21世紀の商店街」という少人数セミナーを担当しています。そこで取り上げていることは、地域の商店街の活性化の問題です。応募学生は商学部の学生が60名ぐらい集まりました。60名では少人数になりませんので、24名にカットしました。そして4グループで4人の教員が担当しています。

私は、まあ日吉商店街のおじさんたちはよく知っていますが(笑)、21世紀の商店街についての専門的な知識はゼロです。そこで学生たちがやっていることは、一応専門の入口的な内容もやっていますが、ほとんどは教養の専門ですよ。そんなに専門といきがるところでもない。ですから、

私も学生といっしょになって学びつつ授業を行っているわけです。グループ学習のようなことをやって、学生6名ずつを4人の先生がそれぞれ受けもっているわけですが、ミーティングでしょっちゅう学生同士が議論や考え方のちがいでぶつかりあいますよね。だれかがまとめなければいけない。先生のなかには学生たちのなかに入っていく先生もいらっしゃいますが、私はいつも遠巻きに見ているだけです。私は学生たちが困ったときにアドバイスしたり、プリントアウトぐらいはしてあげるって感じでやっている程度なので、教師としては失格ですが、ただ学生はどんどん自分でやっていかなければいけないということで頑張っていて、わりあいおもしろく進んでいきます。専門と教養的なものはあまり乖離していないのではないかと私は思っています。専門をやるにしても教養的なものが必要ですし、教養もある程度専門的な知識がないとおもしろくないですから、そこは補完関係でやるほうがいいのではないのでしょうか。あまり教養だ、専門だと区別しないほうがいいのではないかというのが率直な意見で、学生を見ていてもそんな気がします。

少人数授業を通じて得たもの

南公人(商学部1年) 私は現在、教養研究センターでスタディ・スキルの授業を取っているのですが、授業を取った経緯と、取ってみての感想をお伝えしたいと思います。

入学して学習指導の先生からガイダンスを受けたときに、「三田に行ってゼミに入ったときに役立つので、少人数セミナーをなるべく受講してください。また総合教養セミナーとは別枠に教養研究センター設置のスタディ・スキルの授業があり、これも非常に興味深いのでぜひ参考にするように」と、お話をいただきました。自宅に帰って分厚い講義要綱に目を通して、非常にとっつきにくいな、なんでこんなに分厚いんだと思いながら読み進めていきました。スタディ・スキルズは実験的な授業なので、モルモットにはされたくないと思ったので、まず総合教育セミナーのページから目を通していきました。おもしろそうなんだけど、入ってみて、自分のイメージとまったく違っていたらどうしよう。逆の場合も、入ってみて思ったよりおもしろければいいのですが、非常に不安感やためらいがありました。スタディ・スキルズの履修案内を見ましたら、基本的なスキルから教えていただけることと、学部横断的な、他学部の学生も受講できるという点にひかれまして、履修することにしました。

履修申告をして、授業が始まる前の段階の2週間ほどは、自分自身の大学とのつきあい方がよくわかりませんでした。なぜかという、私の出身高校は学年が3クラスしかないほどのこじんまりとした学校だったので、どうやって人につきあったらいいのかわからなかったからです。クラスはあるけれども、クラスのつながりはまったくない。自分が大学の枠のなかに放り込まれて、宙に浮いた状態で、非常に困っていたわけです。そのようななかで、スタディ・スキルズの授業を受けるようになって、同じ班だけでなく、他の班の人とも仲良くなりました。そこで知り合った友だちも、遊びに行くことがあるだけでなく、授業で基本的なスキルも身につけるということで、二重に取ってよかった授業だと思います。いまもいいと実感しながら授業を受けています。

この授業を通して私が感じたことは、読んだり、考えたり、まとめたり、表現する基本的な能力を身につけることと、他の学部の学生と交流できる機会を同時に実現できる授業があればいいということです。今日のお話を聞いて、さらに全学部をごちゃまぜにして、スタディ・スキルズの基礎的な文献検索やプレゼン能力やレポートの書き方などを学ぶ必修授業があったらいいだろうなと思いました。

種村 たいへんおもしろいアイデアをいただきました。学部をごちゃまぜにして必修にしたらどうだろうかというご提案です。

猪鼻美帆(文学部1年) 私も教養研究センターのスタディ・スキルズの授業を取らせていただいているのですが、私がここで話したいのは、法学部設置の自然科学研究セミナーです。

私は文学部なのですが、法学部の自然科学研究セミナーを取っており、そこでは遺伝子や少年犯罪といった、まったく文学部に関係ない、法律的なことをやっています。この授業は20人ぐらいで、2、3人でグループを作り、各グループが自分たちのやりたいことを決めて、それについてプレゼンをします。他の人たちは、グループの代表の人の指示に従って下調べをしておき、自分が調べてきたことを授業で話したり、議論したりします。

私がいま、法学部の先輩と2人組で取り組んでいるのは「脳死と臓器移植」というテーマです。先輩から「文学部だから、法律について知らないよね?」と言われて、「はい」と答えたところ、メディアセンターにある法学の本を「これがいいよ。ここからここまできを読んでおきなさい」と教えてもらいました。また、それまでまったく知らなかったプレゼンの仕

方も教えてもらえました。そういうふうに先輩との交流もあったり、他学部の人の知っている知識をもらっているのも、私も他学部との授業の重要性を痛感しています。

拡大のために何を削るか? (Q & A)

小菅隼人(理工学部) 特に長くやっていらっしゃる伊藤先生、あるいは朝吹先生にうかがいたいのですが、いまのお話を聞いていてスタディ・スキルズの必要性についてはよくわかりました。少人数セミナーがすばらしいということもよくわかりました。ただわれわれがこれをやる場合には、やはり拡大していくためには何かを削らなくてはいけないということがあると思うんです。これは校舎の問題とかではなくて、教える側の能力の問題、あるいは教えられる側の能力の問題があると思います。経済学部や法学部については、拡大していくうえで、何を削ってきたのか。あるいは何を削ったらいいいと思うかについてうかがいたいと思います。

伊藤 自由研究セミナーに関しましては、具体的なコマ数などを含めて申しますと、経済学部ではかなり早い時期から持ちコマ数としてカウントされていたということがあります。その点ではわりあい恵まれていたと言えるでしょう。その背景には、それぞれの先生がひとつの専門家集団であること、状況が変わればきちんと卒論指導ができるような方たちがたまたま語学だけを教えているということがあります。そういう考えは経済学部のなかでは早くから認識されていて、自由研究セミナーをもつということは、それほど大きな負担ではないとされていました。

ところが、来年の改革以降はどうなるかということですね。これを本当にスタディ・スキルズ的なところから、さらに論文指導というところまで深めていくということになりますと、先ほど申しましたように三田の専門のセミナーと同じ系列のセミナーと同じ単位数、6単位を与えるわけです。ということは相応の時間を要求されるわけです。もちろん当然持ちコマ数のなかにそれを組み入れることになるのですが、先生方にとっても相当の覚悟が必要だということで展開されていきます。

もう少し踏み込んで言えば、この流れが進んでいけば、語学のもっているコマ数などに多少なりとも影響が出てくると思います。それは学部でのコマ数と絡んで、すべての編成に大きく関わってくる問題でして、もう少し展開してみないとわからないのですが、経済学部ではこれから1、2年のうち



に大きな変革がもう一度あるのではないかと考えております。それには何かの授業が犠牲になっていくことはあり得ると思います。

朝吹 法学部の場合も基本的には同じでして、持ちコマのなかに当初からカウントしております。それと多少関連するんですが、一般教育研究会のコマ数は、これがスタートした80年代から実はあまり数字が変わっていませんで、実はあまり誇れるほどのコマ数はなくて、10数コマというのがだいたい平均的なコマ数です。

一方で、先ほども似たような発言をしましたが、スキルを鍛えることの必要性は私も非常に強く感じておりますが、やはり教える側にとっても、教わる側にとっても、果たして本当に必修がいいのかというのは、私はちょっと疑問に思っているところです。当然必修化すれば負担が増えて、負担が増えるのはいいのですが、何かを犠牲にするととなると、非常に微妙な問題を含んでいると思います。

いまの法学部新1年生が3年後に三田に行くときに、人文科学研究会や自然科学研究会を三田に相当数置くことになると思いますが、それはもちろん責任コマ数にカウントしますが、しかし、基本的には何かを減らしてということではないので、結局先生のボランティアに期待することになると思います。

ですから、この解決はすぐには多分できないと思いますが、少人数セミナーや、ちょっと話は違いますが、教養研究センターなどに置かれているような授業というのは学部の壁が徐々に取り払われて、どの学部の学生も履修できるようなものが増えてきております。そうすれば一応、担当者の数がある程度限定されていても、豊富なメニューも揃うし、さま

ざまな履修をしていく可能性が広がりますので、直接の答えにはなっていませんが、そのような努力をしていく。それは先ほどの猪鼻さんのご意見にもありましたが、学生の履修する意欲も高めることになると思いますので、ぜひそういう方向で考えていけば、多少の解決にはつながるのではないかと思います。

少人数セミナーの時間割が見やすく

西尾 これは質問ではなくて、感想です。先ほど田倉さんが話されていたことと関連するのですが、副専攻制度あるいは副専攻認定制度についてこういう場で議論できる状況になってきているのはきわめて嬉しいことだと思いますし、田倉さんがいみじくも「副専攻に高める」とおっしゃっていたように、あらゆるところで全学的な議論にというところまで来たというのは非常に意義が大きなことだと思います。

楽観的かもしれませんが、こういった少人数教育はこれから発展していこうと期待しております。たとえば経済学部では研究プロジェクトを、商学部では関連課題研究を、それぞれ三田で展開されるということですが、僕は個人的には、ふたつの道筋があると思うんですね。経済学部の研究プロジェクトのように形が固まってしまうと、副専攻うんぬんという議論が非常にしにくくなる。やはりこの先、できれば、この副専攻に向けて各学部がもっていけるような形になることを望んでいます。

もう一点、講義要項のことで先ほど熊倉さんがカラーのパンフレットをご紹介になりましたが、僕はこれは非常にいいなと思いました。ああいう形で学生に訴えかけることは非常

に大事なことで、今度は少人数セミナー授業の講義要項が別冊になる可能性があるとも聞いていますが、いかがでしょう？

白石幸男(学事センター) 少人数セミナーは、いま現在、講義要綱・シラバスというところに、ある固まりになって載っております。これを別冊にすることは、現在は考えていません。ただ、これは学事センターの担当者もあまり気づいていなかったのですが、少人数セミナー科目の時間割はそれぞれ設置学部のところには載っているのですが、他学部のところからは見られなかった。そのために、自分の空いた時間にどんな少人数セミナーが取れるのかがダイレクトに探せないというご指摘を、ある先生からいただきました。先ほどから他の学部の人と一緒に学べるのはとてもいいという学生さんの意見も十分うなずけます。私たちは現在、来年度の時間割では各学部の時間割に少人数セミナー科目の時間割を全部載せようということを進めております。時間割は数枚の手作りのようなものになりますが、それを各学部の時間割に少人数セミナーマップということで、春と秋にわけて載せようということです。

鉄は熱いうちに打て！

種村 ありがとうございます。最後に伊藤先生のゼミのOBで、アメリカでご研究をなさっていらっしゃる助川さん、今日の議論に関しまして、アメリカの例などございましたら、ご紹介いただけますか？

助川たかね(経済学部 OB) 私は伊藤先生の自由研究セミナーの3回生で、時代で言いますと、江川投手が法政にいて神宮球場で活躍していた頃だと言えば、どれだけ古いかがわかると思います。自由研究セミナーの形式もいまではずいぶん変わっていますし、私も記憶が薄くなっていて、語るべきことはないのですが、その後社会人になりましてから、先生のセミナーで3回ほどゲストスピーカーとして話をさせていただきました。

初回は通りいっぺんのOHPを使った業界暴露話みたいなことをやって事なきをえたのですが、2回目はちょうど東海岸の大学院に留学した直後でしたので、ちょっと変わったことをやりたいということで、私がアメリカで修士課程の学生に向けて書いた事例研究をやりました。これは恵比寿ガーデンプレイスができるまでをつづったケースなのですが、それを取り上げさせていただきました。そのとき、若い学部生が

本当にケースディスカッションができるのだろうかという懸念はやはり大きかったのですが、いい意味で予想外の出来でした。私自身のハンドリングはまだまだでしたが、いまの学生のポテンシャルは高いと思います。事前にいくつかの課題を与えて、数週間かけて自分たちで考えて、とにかくその場で発言して、お互いに意見を交換しなさいと言ったのですが、予想以上に質の高い議論ができたと思います。

なんともいううれしかったのは、その後ひとりのお嬢さんからお手紙をいただきまして、「こんな方法があるなんて知りませんでした。こんな方法があるんだよと先生に言いたい。自分のゼミの先生にこうやったらうまくできますと言います」と手紙を頂戴したんです。それでちょっと自信を得まして、次回も同じようなケースの形を取らせていただきました。

時間がないので駆け足でお話しますが、少人数セミナーに集約されていることは、基本的には勉強とはいかにするかということだと思うんですね。私がアメリカの大学院で徹底して学んだことは、「勉強は99%自分でやるんだぞ、教室というのはあくまで発表の場であり、刺激する場であり、受け身で出ていたら決して何も得られないんだ」ということです。膨大な文献を事前に選んで、問題意識をもって、自分の意見をクリアにして、そしてそれでもそれに反論されたら、さらに考えてみよう。そういう戦いの場です。大学院ですから、少しレベルが違うかもしれませんが。そういう場なんだということをたたき込まれたわけです。

いまの日本の大学教育では当然講義など座学が多いですから、こうした手法や考え方を一度にもち込むのは無理かもしれませんが、たとえばこういうセミナーを核として、そういった本当に能動的な、自分で勉強して自分で問題意識をもつという手法が確立されていけば、それが経済原論であれ、経営学であれ、商法であれ、応用できることなのではないかと思うんですよ。われわれは100人、200人のクラスでケースディスカッションをやりました。テーブルにはそれぞれマイクがついて、早いもの勝ちで押して、本当に戦場のような90分を毎日毎日過ごしていた。印象から言うと、鉄は熱いうちに打ったほうがいいと思います。若いときにそういう訓練はさせたほうがいい。そうすればその後の人生が本当にラクになって、学ぶことに対するポテンシャルが生まれるというのが、私の意見です。

種村 ありがとうございます。今日出てきたさまざまな問題はこれからいろいろな形で深められていけばいいと思います。今日は長時間ありがとうございました。(了)

少人数セミナー形式授業の 理念・目的とその手法

文学部 坂本 光
2004年12月8日

発表の構成

- 文学部(日吉キャンパス)における少人数セミナー形式授業(=演習)のカリキュラム構成
- 一年生を対象とした演習の一例
- 演習の目的と課題、および見通し

文学部の学年構成

- 1年: 一般教育課程 (日吉キャンパス)
↓
【専攻振り分け】
↓
- 2-4年: 専攻課程 (三田キャンパス)

※ 日吉での一般教育科目履修は1年間のみ
※ 外国語は日吉・三田で計2年間

日吉における演習授業(1/3)

- 特論(人文科学/社会科学/自然科学)
 - 専攻ごとに設置
 - 多くの場合、専攻所属(=三田所属)教員が担当
 - 日吉に対応する部門がある場合、日吉所属教員も担当
 - 運営方針は各専攻による
 - 多くの場合、学生に各専攻分野を能動的に体験させることを目的とする

日吉における演習授業(2/3)

- 総合教育セミナー
 - 半期科目
 - 日吉所属専任教員が担当
 - 設置は各担当者の任意

日吉における演習授業(2/3)

- 総合教育セミナー
 - 半期科目
 - 日吉所属専任教員が担当
 - 設置は各担当者の任意

演習授業の一例(1/3)

- 人文科学特論(英文学)
 - 筆記テストにより選抜した15-20名が対象
 - 春学期
 - 講義: 作品、作家、形式など文学史的知識の説明
 - 演習: 各章ごとに担当者を決め、各回2-3名ずつ発表
 - テキストの読み方
 - 一次・二次資料の検索・収集法
 - ハンドアウト作成法
 - プレゼンテーションの方法
 - 質疑応答の方法

演習授業の一例(2/3)

- 夏休み
 - レポート作成
 - 課題作品: 春学期に取り上げた作品と同じテーマを持つものを、文学作品、映画、演劇、マンガなど、ジャンルを問わず選択。
 - 春学期に取り上げた作品をそのまま選んでも良い。
 - 必ず複数の二次文献を使用する。
- 秋学期
 - レポート返却と講評
 - レポートにもとづく口頭発表

演習授業の一例（3/3）

■ 目的

- 典型的な方法論を用いて文学作品を読むことを、能動的に体験させる
- 大学での学習に必須の各種スキルを習得させる

■ 課題

- 論理的文章を構成する能力の学生差が大きい
- 資料検索・収集の実習に割ける時間が限定される

日吉での演習授業の目的

- 大学で学べること、大学という環境が持つポテンシャルを能動的に体験させる。これを専攻課程進級前にいち早く行う。
- 大学での学習に必要なスキルの訓練を、能動的な学習のプロセスを通して与える。

今後の課題（1/3）

■ 内容の継続性

- 特論
 - 各専攻設置科目への継続性を持つ
- 総合教育セミナー
 - 日吉所属教員による三田設置演習科目への継続性が想定される
 - 上述演習科目の将来的な副専攻化が課題

今後の課題（2/3）

■ 対象学生の見直し

- 現行の演習科目は、積極性を持つ少数の学生が対象
- 学習スキルの訓練は、新入生全員に有用かつ必須
- 従来型の演習科目と並行して、学習スキルの習得を主目的とした演習科目を、必修科目として設置することを検討すべき

今後の課題（3/3）

■ 必修化のための検討課題

- 教員と教室の確保が必須
(30名×30クラス、あるいは20名×45クラス)
- 学習成果を各種授業で秋学期に実践出来るよう、春学期集中が望ましい
- クラス間・教員間で大きな差異が生じぬよう、カリキュラムの明確化、教授法のマニュアル化、評価法の確立が必要

パネリスト紹介（発言順）

伊藤 行雄（いとう ゆきお） 本塾経済学部教授

専攻分野：ドイツ文学、比較文化論

慶應義塾大学文学部独文学科卒業。1973年3月慶應義塾大学文学研究科博士課程単位取得退学。現代ドイツ文学、特に詩人リルケに関する研究。最近はリルケと美術の関係を扱っている。著作・論文等：「パリのエピソードにみられる『マルテの手記』の作品構造」（藝文研究）、「リルケのフォーゲラー論」（日吉紀要ドイツ語・文学）、「東京一私原風景」鼎談（三田評論）、「生と死と都市と」対談（読書のいずみ）、「知と創造のエロスをはぐくむチューリヒ」（三田評論）、詩集『球形の旅路』（書誌山田）、『リルケ全集』全10巻 共訳（河出書房新社）など。

朝吹 亮二（あさぶき りょうじ） 本塾法学部教授

専攻分野：現代フランス詩、シュルレアリスム

慶應義塾大学文学部仏文学科卒業。1982年3月慶應義塾大学文学研究科博士課程単位取得退学。近・現代フランスの詩、シュルレアリスムの諸ジャンル、特にアンドレ・ブルトンの詩についての研究。著書・論文に「シュルレアリスムの都市についてのノート」（慶應義塾大学法学会編「教養論叢」107号、1997）、「アンドレ・ブルトンの詩の読解」（慶應義塾大学法学会編「教養論叢」105号、1997）、「コラボレーション考」（『文学のすすめ』筑摩書房、1996）、「『水の空気』についてのノート」（慶應義塾大学法学会編「教養論叢」95号、1994）、「『狂気的愛』における結晶」（慶應義塾大学法学会編「教養論叢」93号、1993）、「『地の光』論」（慶應義塾大学「日吉紀要フランス語フランス文学」11号、1990）他。

熊倉 敬聡（くまくら たかあき） 本塾理工学部助教授

専攻分野：文化実践論、現代芸術論

慶應義塾大学経済学部卒業。パリ第7大学博士課程修了（文学研究）。特定非営利活動法人「芸術家と子どもたち」理事。著書に『美学特殊C』（慶應義塾大学出版会）、『脱芸術／脱資本主義論』（慶應義塾大学出版会）、『セルフ・エデュケーション時代 Practica 1』（共編著、フィルムアート社）、『女？日本？美？』（共編著、慶應義塾大学出版会）などがある。

坂本 光（さかもと ひかる） 本塾文学部助教授

専攻分野：英文学・文化、19・20世紀

慶應義塾大学文学部文学科英米文学専攻卒業。慶應義塾大学大学院文学研究科英米文学専攻後期博士課程単位取得退学。専門領域は19-20世紀を中心とした英国文学・文化研究で、特に非イングリッシュ系英国作家による作品を対象とする。近年はMary Shelley、Oscar Wilde、Bram Stokerなどによる19世紀英国ゴシック文学を中心に研究。著作に『ユートピアの期限』（共著、慶應義塾大学出版会、2002年）、『イギリス文学と旅のナラティブ』（共著、慶應義塾大学出版会、2004年）など。

種村 和史（たねむら かずふみ） 本塾商学部助教授

専攻分野：中国語、中国古典文学

慶應義塾大学文学部中国文学専攻卒業。1993年文学研究科中国文学専攻後期博士課程満期退学。専門領域は、清朝考証学、宋代詩経学史。経学（儒教の経典研究）の学問方法の発展の歴史を分析して、中国人の学問観と古典観がどのような変遷を遂げてきたかを調べている。刊行書『宋詩選注』1、2（共訳、2004、平凡社東洋文庫）、論文「欧陽脩『詩本義』の揺籃としての『毛詩正義』」（宋代詩文研究会『橄欖』第9号、2000）、「詩の構造的な理解と〈詩人の視点〉——王安石『詩経新義』の解釈理念と方法」（宋代詩文研究会『橄欖』第12号、2004）

ディスカッサント紹介

近藤 明彦（こんどう あきひこ） 本塾体育研究所教授

専攻分野：体育学

日本大学文学研究科教育学専攻博士前期課程 1978 年修了。慶應義塾大学助手、助教授を経て 1995 年から現職。1991 年から 92 年までドイツ・ケルン体育大学留学。専門分野はスポーツ心理学。国際スポーツ心理学会理事、日本スポーツ心理学会理事。

長谷川 由利子（はせがわ ゆりこ） 本塾商学部助教授

専攻分野：比較内分泌学

お茶の水女子大学理学部生物学科卒業。1991 年理学博士号取得（東京都立大学）。担当科目は生物学、総合教育セミナー。甲殻類の性分化を制御する造雄腺ホルモンを手がかりにして、甲殻類の性分化機構について研究している。論文に“ Immunohistochemical Study of Androgenic Gland Hormone: Localization in the Male Reproductive System and Species Specificity in the Terrestrial isopods.” Gen. Comp. Endocrinol. Vol.125, 2002 他がある。

田倉 麻理（たくら まり） 本塾経済学部 3 学年

埼玉県生れ。慶應義塾女子高校 2 年次にデンマーク、Horsens statskole へ留学。現地で地域ボランティアの活動に積極的に参加し 1 年間を過ごす。そこでの体験が「生活の質」を考えるきっかけとなる。大学 1 年次には自由研究セミナー「地域振興を考える」に参加し、長野県栄村にてヒアリング調査を行い、現地の人々の声を交えながら「より良い村づくり」について提案を行う。2 年次には自由研究セミナー「大学教育について考える」に参加。日吉キャンパスにおける現行制度と学生の声をもとに、大学 1, 2 年次における教育の在り方を提言した。現在、秋山裕研究会にて計量経済学を用いながら経済発展論を主に勉強し、客観的なデータからのアプローチも試みている。

森本 陽介（もりもと ようすけ） 本塾経済学部 3 学年

1984 年生。幼少期は貸本屋の軒先で育つ。中学時代、半ば強制的に課された卒業論文で「サッカーと地方活性化」を扱ったことがきっかけで、自主的な論文作成や少人数制授業に興味を持つ。以後、「新幹線建設問題」「夜間中学校存続問題」「六価クロム公害」「都市再生」「地方活性化」「大学教育問題」「アニメ・音楽の証券化ビジネス」など、さまざまな切り口のテーマを考えてきた。大学教育のみならず高等教育の意義とは、高度情報社会の中での思考フレームワークと運用リテラシーの獲得にこそあると考える。少人数制授業はまさにこれらの能力を獲得するためのツールとして位置付けている。趣味は音楽鑑賞。印象派、Claude Debussy の「子供の領分」から始まり、70 年代プログレ、Emerson, Lake & Palmer「展覧会の絵」、そして 00 年代テクノと映像の融合、underworld「EVERYTHING, EVERYTHING」に至るまで天才の「狂気」を聞き、感じ、踊るのがたまらない快感である。

慶應義塾大学教養研究センター第6回シンポジウム
少人数セミナー形式授業の理念・目的とその手法

2005年2月24日発行

編集・発行 慶應義塾大学教養研究センター

代表者 横山千晶

〒223-8521 横浜市港北区日吉4-1-1

TEL 045-563-1111 (代表)

Email lib-arts@hc.cc.keio.ac.jp

<http://www.hc.keio.ac.jp/lib-arts/>

©2005 Keio Research Center for the Liberal Arts

著作権者の許可なしに複製・転載を禁じます。